

明日をひらく地域活性化のための情報誌

# 地域づくり

2012

3

ISSN 1340-8917



特集 ■ 平成 23 年度  
地域づくり総務大臣表彰

本誌は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです



特集

# 平成23年度 地域づくり総務大臣表彰

## 4 平成23年度 地域づくり総務大臣表彰

大賞は宮城県南三陸町に一三十団体と七個人の功績をたたえるー

### 大賞〈1団体〉

●宮城県南三陸町【宮城県】6

### 優秀賞〈1団体・2名〉

●岩手県遠野市【岩手県】8 ●久慈浩介氏【岩手県二戸市】9 ●金城笑子氏【沖縄県大宜味村】10

### 団体表彰〈計21団体〉

●NPO法人ねおす【北海道札幌市】11 ●八戸せんべい汁研究所【青森県八戸市】12 ●NPO法人遠野まごころネット【岩手県遠野市】13 ●NPO法人せんだい・みやぎNPOセンター【宮城県仙台市】14 ●NPO法人石巻スポーツ振興サポートセンター【宮城県石巻市】15 ●NPO法人フェアトレード東北【宮城県石巻市】16 ●いきいき深山郷づくり推進協議会【山形県白鷹町】17 ●逢瀬ゆめくらぶ【福島県郡山市】18 ●浪江焼酎太国【福島県浪江町】19 ●おらが湊鐵道応援団【茨城県ひたちなか市】20 ●取手アートプロジェクト実行委員会【茨城県取手市】21 ●八王子センター元気【東京都八王子市】22 ●十日町市地域おこし実行委員会【新潟県十日町市】23 ●全日本大学女子野球選手権大会魚津市実行委員会【富山県魚津市】24 ●NPO法人田原菜の花エコネットワーク【愛知県田原市】25 ●被災地NGO協働センター【兵庫県神戸市】26 ●NPO法人豊かな食の島岩城農村塾【愛媛県上島町】27 ●株式会社赤岡青果市場【高知県香南市】28 ●到津の森公園市民ボランティア「森の仲間たち」【福岡県北九州市】29 ●財光寺農業小学校【宮崎県日向市】30 ●宮古織物事業協同組合【沖縄県宮古島市】31

### 地方自治体表彰〈計6団体〉

●岩手県一関市【岩手県】32 ●岩手県住田町【岩手県】33 ●宮城県大崎市【宮城県】34 ●宮城県川崎町【宮城県】35 ●東京都江戸川区【東京都】36 ●静岡県富士宮市【静岡県】37

### 個人表彰〈計5名〉

●新井偉夫氏【宮城県石巻市】38 ●松井利夫氏【神奈川県相模原市】39 ●向峠智隆氏【石川県能登町】40 ●高橋幸照氏【三重県多気町】41 ●安川恵造氏【兵庫県太子町】42

### 奨励賞〈1団体〉

●財団法人出雲市教育文化振興財団（出雲芸術アカデミー）【島根県出雲市】43

## レギュラーレポート

44 ～北から南から～ 滋賀県彦根市  
ゆるキャラ（R）グランプリに一票を！ 荒川深冊

45 首長の思い  
徳島県に残った唯一の村 原 仁志（徳島県佐那河内村長）

48 センター通信

## グラビア

2 平成23年度 地域づくり総務大臣表彰

46 都道府県漫遊 【岐阜県】

47 手前みそですが… 【熊本県水俣市】



「平成盛館」テープカット

（写真提供：大河ドラマ「平成盛」広島県推進協議会、廿日市市）

また、平成盛ゆかりの地や瀬戸内海の多島美を眺めながら列車の旅を満喫できる「平成盛マリンビュー」や、平成盛関連のラッピングを施した「ひろしま清盛電車」、宮島と音戸の両ドラマ館を船で結ぶ直行高速船「きよもりブルーライン」の運行を始めるなど、様々な取り組みを展開中だ。

広島県では「今年はずいぶん、清盛の広島へお越しください」と、観光客誘致にも力が入っている。

宮島に「平成盛館」が、音戸には「平成盛 音戸の瀬戸ドラマ館」が同時オープンし、ドラマの撮影で使った衣装や小道具のほか、各地の伝説や史料などが展示され、ドラマで描かれている先見的で躍動感あふれる平成盛の姿が体感できる。

表紙  
清盛マリンビュー

（広島県）

# 時代の変化とこれからの地方自治

全国知事会会長（京都市知事） ● 山田啓二



昨年三月十一日に東日本大震災という未曾有の災害が発生して、はや一年が経とうとしています。改めて、亡くなられた方々に心からお悔やみを申し上げますとともに、被災者の皆様にお見舞いを申し上げます。この冬は例年になく強い寒波が襲来し、被災地では厳しい生活に追い打ちをかけているのではないと思いますが、全国知事会といたしましても、東日本大震災復興協力本部を通じて、今も職員の派遣など全力を挙げて対策に取り組んでいるところです。

今回の震災では、原子力発電所の事故により、これまで行政が前提としていたものが根底から崩れてしまうという厳しい現実と直面することとなりました。また、欧州諸国の経済情勢の悪化などを原因に、過去最高値を更新する歴史的な円高が進行するなど、行政を取り巻く状況は大きく変化している中、ものづくり産業の生産拠点の海外移転やTPP交渉への参加問題など多くの課題が生じており、今こそ私たちは将来に對し、しっかりと課題を見つめながら国を挙げて時代の波に立ち向かって行く必要があります。

まさに、誰も経験したことのない時代にあつて、国と地方がしっかりと連携をして国民生活を支えていくことが、今ほど求められている時代はないと思います。

昨年五月に「国と地方の協議の場」が法制化されましたが、この法律は、その成案策定過程において、最初に地方側が案文を提出し、それに国が対案を示すことにより、最終的に国と地方が合意して成案化できたという点で、地方自治史上画期的なものでありましたが、この法案の最大の目的は、国難とも言える現在の状況乗り越え、我が国が再生を果たすために、この協議の場を通じて、国と地方が新しい協調関係を築き、企画・立案段階から協議することにより、今までにない効果的・効率的な政策を形づくっていくという点にあります。

この背景には、地方自治が成長過程にある中で一つの

転換期を迎え、地方が役割分担により決められたことをやる時代から、国と対等に物事を考え提案する時代、国ができないことを地方がやる時代に入ったと言えます。これまで、「国と地方の協議の場」を通じて、社会保障と税の一体改革や子どもに対する手当などについて議論を重ねてまいりました。まだまだ協調とまではいかず、国と地方の対立の構造から基本的に抜け出せていないのは残念でありませんが、当初は「地方はまともでないし、まともでない地方と協議するのは問題である」と言われたのに対し、昨年六月の第一回会合以来、地方六団体が結束して行動できたことは大きな成果であり、一つの政策決定の場として「国と地方の協議の場」が認知され、地方の意見が尊重されるようになったことは、大きな進歩であると思います。

こうした現状を背景に、社会環境の変化に行政が行けず、国民に閉塞感が漂っている中において、今後、地方自治は新たな発展段階に入り、自治体が自分の能力を発揮するため主体的に国と地方の関係を構築し、課税自主権の拡大や特区制度の活用、国の出先機関の移管など、自立を主張する「ハイパー地方自治」の時代を迎えようとしております。しかし、この時代は一つ間違うと、地方自治の弱肉強食時代になる危険性もあるだけに、それぞれが地方がそれぞれの力を発揮しながらお互いに支え合う「真の自治」の時代へと進めていかなければなりません。そのためには、この国のあり方についての明確なビジョンが必要であり、こうした観点から、全国知事会では、「日本のグランドデザイン構想会議」を発足させるとともに、自治体における行政体制のあり方についても組織を立ち上げ、積極的に検討を進めているところです。

大変困難な状況にある今こそ、地方から復興への歩みを進め、日本再生の灯りを強く大きなものとし、我が国全体を明るく元気にしてまいりたいと考えております。

# 平成23年度 地域づくり総務大臣表彰

## 大賞 宮城県南三陸町



月に一度の「福興市」は町民らの再会の場に（上）、地域ガイド活動風景（左）、彩プロジェクト＝被災前の撮影（右）

● 宮城県南三陸町 (p6-7)

## 優秀賞 岩手県遠野市



沿岸被災地への後方支援拠点となった遠野市の地理的概要及び経路計画（左）、物資センター（右） ● 岩手県遠野市 (p8)



地元コミュニティ FM で番組収録の様子 (左)、糖類無添加梅酒に使う梅のヘタ取り作業 (右) ● 岩手県二戸市 (p9)



修学旅行生受け入れの様子 (左)、お年寄りたちが生徒らに食育を指導 (右) ● 沖縄県大宜味村 (p10)

## 地域づくり総務大臣表彰式での全員の記念写真と表彰式の模様



表彰式での全員の記念写真 (上)、黄川田総務副大臣の挨拶 (右上)、講演する月尾座長 (右中央)、シンポジウムの様子 (右下)



# 平成23年度 地域づくり 総務大臣表彰

## 大賞は宮城県南三陸町に —三十団体と七個人の功績をたたえる—

地域の個性豊かな発想を活かし、魅力あふれる地域づくりに顕著な功績のあった地域づくり団体、民間企業、地方自治体および個人をたたえる平成二十三年地域づくり総務大臣表彰が二月四日、宮城県仙台市の仙台国際センターで行われた。

表彰式は一分間の黙祷の後、黄川田総務副大臣が各受賞団体・個人の地域づくり活動の功績や情熱を称賛し、東日本大震災の復興に向けた様々な取り組みの展開や地域活性化への寄与、地域を支える人材の育成を願う式辞を述べ、三十団体と七名に表彰状を授与した。

表彰式に引き続き、記念講演とシンポジウムが行われた。記念講演では「地域づくり懇談会」の月尾嘉男座長が「足元の宝物で地域を再生」と題して講演し、視点を変えることによって地域の課題が地域の活性化にもつながるという地域づくりの秘訣を語った。

「あるものを活かした地域づくりと震災復興」をテーマにしたシンポジウムでは、「地域づく

り懇談会」の政所利子委員がコーディネーターとなり、同じく懇談会委員の渡邊英彦氏とともに受賞者の取り組みについてディスカッションを行った。

大賞を受賞した宮城県南三陸町の佐藤仁町長は、東日本大震災後からの復興に向けた「南三陸復興市」や「被災地学習プログラム」などの取り組み、優秀賞を受賞した遠野市は沿岸被災地への支援拠点として活躍を、また久慈浩介氏は東北の物産品を盛り立てる活動、金城笑子氏は地域資源を活用した地域活性化の取り組みをそれぞれ紹介。さらに、団体表彰を受賞した浪江焼麺太国の八島貞之氏は、なみえ焼きそばの震災後の取り組みについて語った。

この表彰の趣旨は「地域を良くしようとする」団体または個人をたたえるというもので、受賞者は、①ユニークで創意工夫があり他の模範となる取り組みや、地域の特性を活かした取り組みなどの先進性・独自性、②活動の継続や、効果・実績の定着などの継続性、③規模の拡大や

内容の多様化、他地域への波及などの発展性、④自主的・主体的な取り組み、⑤住民と行政の協働性、住民や国、県との連携性、⑥住民の満足度、地域経済の活性化、雇用の創出、地域文化の創造、地域の知名度やイメージ向上などの効果、⑦後述の各表彰の種類に応じた功績——などの審査基準に基づき、選出された。

### 大賞

全推薦事例の中から、特に優れた取り組みに対して授与されるもので、今回は宮城県南三陸町が受賞した。

### 優秀賞

大賞に次いで優れた取り組みに対して授与されるもので、岩手県遠野市と久慈浩介氏（岩手県二戸市）、金城笑子氏（沖縄県大宜味村）の一団体、二個人が受賞した。

### 団体表彰

地方をより良くしようと尽力された団体に対して授与されるもので、特定非営利活動法人フェアトレード東北（宮城県石巻市）など二十一団体が受賞した。「地域を良くする」という言葉には、経済の活性化や伝統文化の維持、国

# 受賞団体・受賞者一覧

敬称略

## 大賞〈1団体〉

宮城県南三陸町

【宮城県】

## 優秀賞〈1団体・2名〉

岩手県遠野市

【岩手県】

久慈 浩介

【岩手県二戸市】

金城 笑子

【沖縄県大宜味村】

## 団体表彰〈計21団体〉

特定非営利活動法人 ねおす

【北海道札幌市】

八戸せんべい汁研究所

【青森県八戸市】

特定非営利活動法人 遠野まごころネット

【岩手県遠野市】

特定非営利活動法人 せんだい・みやぎNPOセンター

【宮城県仙台市】

特定非営利活動法人 石巻スポーツ振興サポートセンター

【宮城県石巻市】

特定非営利活動法人 フェアトレード東北

【宮城県石巻市】

いきいき深山郷づくり推進協議会

【山形県白鷹町】

逢瀬ゆめくらぶ

【福島県郡山市】

浪江焼麺太国

【福島県浪江町】

おらが湊鐵道応援団

【茨城県ひたちなか市】

取手アートプロジェクト実行委員会

【茨城県取手市】

八王子センター元氣

【東京都八王子市】

十日町市地域おこし実行委員会

【新潟県十日町市】

全日本大学女子野球選手権大会 魚津市実行委員会

【富山県魚津市】

特定非営利活動法人 田原菜の花エコネットワーク

【愛知県田原市】

被災地NGO協働センター

【兵庫県神戸市】

特定非営利活動法人 豊かな食の島 岩城農村塾

【愛媛県上島町】

株式会社 赤岡青果市場

【高知県香南市】

到津の森公園 市民ボランティア「森の仲間たち」

【福岡県北九州市】

財光寺農業小学校

【宮崎県日向市】

宮古織物事業協同組合

【沖縄県宮古島市】

## 地方自治体表彰〈計6団体〉

岩手県一関市

【岩手県】

岩手県住田町

【岩手県】

宮城県大崎市

【宮城県】

宮城県川崎町

【宮城県】

東京都江戸川区

【東京都】

静岡県富士宮市（都市整備部都市計画課）

【静岡県】

## 個人表彰〈計5名〉

新井 偉夫

【宮城県石巻市】

松井 利夫

【神奈川県相模原市】

向峠 智隆

【石川県能登町】

高橋 幸照

【三重県多気町】

安川 恵造

【兵庫県太子町】

## 奨励賞〈1団体〉

財団法人 出雲市教育文化振興財団（出雲芸術アカデミー）

【島根県出雲市】

合計 30団体、7名

## 個人表彰

個性豊かで活力あふれる地域づくりのため、

地方独自のプロジェクトを自ら考え、前向きに取り組み、地方自治体に対して授与されるもので、岩手県一関市など6団体が受賞した。

## 地方自治体表彰

際交流、コミュニティづくりなど、さまざまな解釈があるが、あらかじめ細かく要件を指定することは避け、地域の実情を踏まえた選定が行われた。

## 奨励賞

自ら率先し、地域づくりに貢献している個人に対して授与されるもので、向峠智隆氏（石川県能登町）ら5名が受賞した。

今後、一層の発展が望まれる取り組みに対して授与されるもので、財団法人出雲市教育文化振興財団（島根県出雲市）が受賞した。  
今回の表彰を通して、地域づくりへの情熱や思いが広く波及し、豊かで活力ある地域社会の構築がより一層進展することが期待される。

黄川田総務副大臣から大賞を授与された佐藤南三陸町長

# 「地域力」が育む、復興への光

## ―逆境の中で培った郷土愛と町民らの努力―

宮城県南三陸町は、平成二十三年

三月十一日、東日本大震災により壊滅的な被害を受けた。リアス式海岸特有の入り組んだ地形により、大津波は市街地の奥深くまで達した。

多くの尊い命を一瞬にして奪い去り、思い出や街並みすべてを飲み込み、電気や水道などインフラのすべてを破壊した。

震災直後、まさに修羅場と化した被災現場は、断続的に発生する余震の中で犠牲者の収容や行方不明者の捜索、避難者への食糧や水の供給、医師・医薬品の確保、道路の復旧など通常では考えられない非常事態の連続であった。

しかし、その現状から自らの手で、足で、底力で立ち上がろうとしたのは、紛れもなくこの町に暮らす「人」であった。

### 南三陸の復興は「復興市」から！

震災前、市街地中心部にある商店街「おさかな通り」では、疲弊する町を商店街から立て直そうと、商店街と地域、学校や外部団体と連携し「大漁市」をはじめとした物産市を開催していた。その連携を活かし、さらに発展させ地域の交流を促進させようと取り組みを進めていた矢先の震災となった。

しかし、山内正文実行委員長をはじめとする商店主たちは「自分たちはここで立ち止まる訳にはいらない」「南三陸の復興は自分たちから！」と思いをついに立ち上がった。家も店も工場も流失し、売る商品も全くないという極限下で、全国ほううさい朝市ネットワークなどの協力を得て、四月下旬「第一回南三陸福



町長 ● 佐藤 仁

興市」の開催にこぎつけた。

十六張りのテントからスタートした復興市も、世界中からの支援を受けながら継続し、今では五十張りのテントが軒を連ね、復興の光として地域をけん引している。

復興市は単に商売のステージではない。この場を通して地域住民が集い、笑顔に出会い、訪れた方々も巻き込んで復興への活力を生み出している。それがこれまでの道のりの成果であり、またこの町の魅力であると言える。

### この地に生きる意義

平成二十年度の仙台・宮城DC（ディステイネーション・キャンペーン）をきっかけに、自分たちの暮らす町を見つめ直そうと始まったのが「ふるさと観光講座」である。

その取り組みの中から地域の有志が集い、町の魅力を自分たちの言葉で伝える「地域ガイド」として活動を行っていた。あの三月十一日も、近隣の町と観光連携を図るべく、ガイド研修の真っ最中であった。

震災後、毎日、本当に多くの支援の方々がやって来る中で、「自分たちにもできることはある！」と気付かされた。変わり果てた町の姿を見るたびに涙が溢れる日々が続いたが、少しずつ少しずつ動き出す地域の中で、それぞれの「役割」を感じ始めた。

復興市での語り部の活動をきっかけに、再開した地域ガイドは、現在「南三陸学びのプログラム」を（社）南三陸町観光協会と共に立ち上げ、世界中から訪れる方々とのご縁をつないでいる。そしてこの活動を通して、何より関わる地域の人々が、今この地に生きるため、そしてこれからも生きていくため、自分がここに在ることの意義を感じている。

### 女性がうれしい南三陸へ

「地域の魅力」が改めてクローズアップされていく中、新たな世代にもこの町をより楽しく魅力あるものにしていきたい、との機運が高まっている。

旅行消費者の大半を女性が占める中、ビジターを楽しませるには、まずこの町に住む女性たちも楽しめる施策を展開できないか、との思いで立ち上がったのが「女性による観光まちづくりチャレンジ事業」であり、その中のひとつが「きりこプロジェクト」である。

古くからこの地域に伝わる文化の「きりこ」(注\*)の手法を用いた。駅前から続く約二キロの通りに、女性たちがインタビュに訪れ、それぞれの家庭やお店にまつわる物語を掘り起こし、その物語を「きりこ」に表し、軒先を彩ったのである。

夏の終わりの海辺の町を飾った白い紙は、儂くも美しかった。

この取り組みによって、地域との触れ合いを通し、女性たちが町の中

で生き生きと活動する楽しさや、町を彩ることの楽しさを再認識することができた。活動は徐々に加速し、女性によるご当地メニューの提案や、新たなイベントの創出につながっていったのである。

そこから生まれた地域団体が「彩プロジェクト」である。

そんな女性たちの前に立ちはだかった震災という壁は、あまりにも高かった。しかし「きりこ」を通してつながった多くのご縁に支えられ、女性たちはもう一度この町で生きる力を取り戻した。

昨年の夏には、各地から寄せられた二百三十枚ほどの「きりこ」が南三陸の夏を彩り、また各地に自分たちの取り組みの紹介と「きりこ」の素晴らしさを伝えている。現在、オ

リジナルグッズやイベントの展開を図り、女性の手仕事の応援や地域の取り組みの情報発信につながることを目指して活動を続けている。

### 復活！南三陸キラキラ丼

平成二十一年秋。この町の最も強みでもある食を取り込み、町内各飲食店が連携し、南三陸の美味しい海産物を提供する丼シリーズを開発した。それが「南三陸キラキラ丼」シリーズである。

特産のイクラやタコ、ウニなどを産地ならではの鮮度で提供し、訪れる方々を喜ばせた。個店ではなく連携で取り組みを行い発信の幅も広がったことが功を奏し、小さな海辺の町に初めて行列ができる店もあった。震災後、参画店舗のほとんどが流出

という地域の力であった。

その思いが実を結び、「志津川福興名店街」(今年二月下旬にオープン)を中心に、「復活！南三陸キラキラ丼」が再開した。まだ震災前の店舗数には満たない。しかし、誰かが少しでも走り続けていれば、おのずとその機運は高まっていく。

私たちに恵みをもたらす海が生きていくことに感謝しつつ、この食を通してたくさんの方々に南三陸の元氣と底力を伝えたい。

今回紹介したのは、復興に向けた地域の取り組みのほんの一部である。未曾有の震災に見舞われながら、このような地域の力が動き出したのは、世界中からの温かいご支援とご協力はもちろんのこと、震災前からの経験や人的ネットワークを活かし、地域に対する情熱を持ち続けていられたことが原動力につながったからだと言える。

復興にはまだまだ長い時間を要する。しかし、私たちはこの逆境の中で培った絆や郷土愛、そして「地域力」を誇りに一歩一歩、未来に向かって歩き続けていく。

(注\*)「きりこ」とは、古くからこの地域に伝わる文化で、大漁や豊作、商売繁盛を願って神社の宮司が一枚の紙からめでたい絵柄を切り抜く技法で作られた飾りのことである。



「南三陸復興市」の模様



「地域ガイド活動」の様子



彩プロジェクト(震災前)

という被害を受けたながらも、その思いが薄れることはなく、もう一度この町の魅力をみんなが発信したいと動き始めた。

それを突き動かしたのも、やはり共にこの町を復興させよう

# 「縁」が結ぶ復興への「絆」 —官民一体の後方支援の拠点に—



総務部沿岸被災地後方支援室長

● 菊池保夫

平成二十三年三月十一日に発生した東日本大震災は、東北地方沿岸部に甚大な被害をもたらした。

遠野市は、震度5強の地震により市内全域が停電・断水、市庁舎中央館が全壊するなどの被害を受けたが、人的・住家被害等は比較的少ないことが同日夕方には確認された。

十三日に「東日本大震災後方支援活動本部」を設置。二十八日には「沿岸被災地後方支援室」を立ち上げ専従職員を配置して、沿岸被災地への後方支援活動を展開してきた。

遠野市は、藩政時代から沿岸部と内陸部の交易の要衝として栄え、本市を中心とした半径五十<sup>キロメートル</sup>の円内には、沿岸部の宮古市、山田町、大槌町、釜石市、大船渡市、陸前高田市、さらに内陸部の盛岡市や奥州市までを包括しており、ヘリコプター

で十五分、陸路で一時間の時間距離となっている。地質は花こう岩で地盤が安定しており、有事の際には後方支援の拠点として適する環境にある。

## 生かされた二度の訓練

平成十九年十一月には「三陸地域地震災害後方支援拠点施設整備推進協議会」を設立し、「地震・津波災害における後方支援拠点施設整備構想」を策定。大規模災害が起きた場合、沿岸自治体そのものが機能不全に陥る危険性を予測し、支援物資の収集・仕分け、ヘリポートや野営地、宿泊場所の確保など、「災害への備え」をいち早く整えた。

この構想を基に、平成十九年及び平成二十年に二度の大規模な訓練を実施。関係機関と地域住民が合同で、

部隊集結、人命救助及び給水・給食・入浴支援の民生支援などの訓練を行った。

地道な準備が「千年に一度」といわれる東日本大震災でも生きた。発災から十四分後には遠野運動公園を開門、十二日未明には支援物資を積んだ車両を大槌町に派遣した。避難所へのおにぎりや燃料、毛布などの救援物資の提供のほか、市民・職員ボランティアの派遣、入浴サービス、自衛隊や消防、警察への滞在場所の提供、全国から届く物資の中継、応急仮設住宅の整備、文化復興プロジェクトなど、ハード、ソフト両面からの支援は多岐にわたる。

民間の意識のレベルも高い。市総合福祉センターでは、震災直後から市民ボランティア等を中心に、おにぎり作りを始め、三月十二日から四月中旬までに計十四万食を超える炊き出しを被災地に届けた。

全国のボランティアを調整する被災地支援ネットワーク・NPO法人遠野まごころネットは、三月二十七日の設立以来、がれき撤去や救援物資の提供、被災者の心のケアなど、きめ細やかな運営で被災地を支えている。

一人一人の市民が「自分に何ができるか」を考え、心のこもった活動を展開したことが、遠野市の後方支援を強力に後押しした。

## 震災の教訓を生かしたまちづくり

震災後、地域経営を取り巻く状況は一変した。二〇一二年は、ふるさとの復興・再生に向かって挑む節目の年と言える。まちづくりに対する考え方も大きな変化が必要とされる中、これまでに培われた「縁」を復興の『絆』として一つの大きな力に変えて、地域の再生に立ち向かう姿勢が今こそ必要である。



自衛隊集結



物資センター



市民ボランティア

優秀賞

岩手県 二戸市

## 久慈浩介氏

# 動画サイトの呼び掛けが大反響 —東北の物産品の応援消費を拡大—



株式会社南部美人 専務取締役

私が酒造りをしている二戸市は、岩手県内陸北部に位置する中山間地域の約三万人のまちで、岩手県北の拠点都市として発展してきた。

### 震災前から地域情報を発信

私は家業のかたわら、青年会議所活動等を通じて地域に密着した活動を行ってきた。中でも「地域の発展には地域の情報化が欠かせない」と

の思いから、平成十四年の新幹線二戸駅開業を契機とした、東北初のNPO法人によるコミュニティFMの開局に汗を流し、現在も番組の企画運営及びパーソナリティーとして携わり、地域情報を発信している。

また、酒の仕込みがないオフシーズンには、自社の酒蔵を解放してお酒と郷土料理と一緒に音楽を楽しむ「酒蔵ライブ」を開催し、地域の食

文化と音楽の融合によるまちづくりに取り組んできた。教育機関から要請があれば、自らの活動を紹介する出前講座にも出向いている。

東日本大震災により、岩手県の沿岸部は津波で壊滅的な被害を受け、内陸部も停電や燃料不足などで大混乱に陥った。そして、全国的なイベント等の自粛ムードが広がった。

私も震災で親友を失い、自分は「生かされていること」を痛感したが、落ち込んでいただけでなく、我々若者が行動を起こさなければいけないという危機感を持った。

### 「どうせ飲むなら東北の酒を」のつぶやきに反響が

その時、私はツイッターで「どうせ飲むなら東北の酒を一杯だけ飲んでください。どうせ食べるなら東北の食材を一品だけ使って料理を作ってください。そういうことも東北の支援につながります」とつぶやいたところ、「それならできる」といった反響があった。

さらに、同じ岩手の蔵元と一緒に、ユーチューブで花見の自粛ムードの払拭を呼びかけたところ、一週間で十萬回以上の視聴につながり、「自粛を自粛する」

社会現象が巻き起こった。その後、福島、青森、宮城の蔵元も加わり「ハナサケ！ニッポン！」という会を組織でき、蔵元だけではなく著名人や地元からもバックアップを受けることができた。

こうした東北地方の産品を「買って」「飲んで」「食べる」ことで、長期的に被災地を支援しようという「ハナサケ！ニッポン！」の取り組みは、視聴者から大きな反響を得て、花見シーズンの自粛ムードの払拭など、東北地方の経済的な復興への理解を深めるきっかけとなっただけでなく、被災地応援に向けた意識醸成に大きく寄与できたと思っている。

### 震災以前より素晴らしい東北を目指して

今後は、会の一員として地道に未永く「東北のお酒と物産品を応援消費してもらう」ということに注力し、酒蔵の様々な情報を発信していきながら、復興の花が咲くまでこの「ハナサケニッポン」の活動を継続していこうと思っている。



青年会議所で2007年に取り組んだ事業「世界一長い焼き鳥」で世界一達成



岩手県南の金ヶ崎中学校での出前講座



南部美人の酒造りの様子

で十萬回以上の視聴につながり、「自粛を自粛する」

また、東北の復興に寄与するため、様々な復興支援の事業に参加するなど、二〇一一年三月十一日以前の東北よりも、素晴らしい東北になるよう積極的な行動をおこしていきたいと考えている。

## 金城笑子氏

# 「長寿の村」で取り組む活性化 ―高齢者の知恵を活かし特産品開発―



笑味の店店主

大宜味村は、沖縄本島北部に位置する人口約三千四百人の村で、世界有数の「長寿の村」として名を知られている。村の特産品であるシークワサー（沖縄在来みかん）には、その効能が全国的に広がる前から着目し、村民がその価値に気づくよう、商品開発に力を入れてきた。

それまでは、ジュースやゼリーなど、果汁で出来るものに限られており、もっと多様な商品の開発しよう

と、絞ったエキスを伝統菓子・アガラサー（蒸しカステラ）を試作したが、酸や余分な水分が邪魔をした。

## シークワサーの効能活かす

試行錯誤を重ねる中で発見したのが、搾汁残渣物（特許取得）を用いることにより、シークワサーの爽やかな香りと色を生かしたアガラサーのほか、餅、麺、ちんすこう、アイスクリーム、たれなど多くの製品の誕生につながった。

後にシークワサー

には発ガン性抑制成分などが含まれることが分かり、県内外から注目を集めるようになった。中でも、全国的によく流通しているの

は、シークワサー果汁やウコン、ニンニクなどをブレンドした調味たれ「笑味たれ」（商標登録）で、ネット上でも口コミなどで広がり、購入者同士でたれを使ったレシピを情報交換するまでになっている。

食食同源を生活の中で力強く実践してきた高齢者の暮らしと知恵を伝えるため、シークワサーの他にも商品開発を進めてきた。サクナやハシダマ（水前寺菜）、イチチョーバー（ウイキョウ）といった島野菜は、沖縄の風土に合い、育てるのにも手間が少ない。高齢者の生産にも無理がないこれらの野菜を材料にした商品も開発するため、乾燥した島野菜などでドレッシングやふりかけなどの商品も展開している。

## 体験型の食育と グリーンツーリズムを展開

商品開発と並行して、村の高齢者が育てた島野菜を食材に用い、郷土料理の良さを伝える飲食店「笑味の店」を平成二年から経営してきた。

看板メニューである「長寿膳」には、独特の香りや色、ぬめり、苦味など、強い個性を放つ島野菜の魅力を味わえる十五種類以上の料理を詰めている。この地でしか口にできない伝統食や島野菜は、全国から訪れる客に好評を得ている。

また、店舗隣に体験施設を整備し、老若男女を問わず、畑での収穫や料理の体験教室を開催し、食育とグリーンツーリズムにも力を注いできた。大人数のツアー旅行者を受け入れる際には旅行会社と連携し、公民館を会場に、旅行者と村の高齢者が長寿膳弁当と一緒に食べ、畑や集落を散策しながら触れ合える場を提供している。このガイド、司会、接客を高齢者に依頼。（雇用）ツアー客の満足度は高く、また高齢者は彼らの喜ぶ顔を見て、やりがいを感じる。

さらに、店では村内の高齢者や若い女性を雇用しているほか、WWOOF（世界に広がる有機農場での機会）制度を利用し、国内外から研修生を受け入れている。村に新しい視点をもった若い人材が入ることは、店、高齢者、村民、研修生、それぞれの刺激となっている。

老いてますます元気。高齢者の元気の源は、九十歳、百歳になっても続けている畑仕事にあると感じる。この高齢者の育てる島野菜を使った商品の開発と販売をさらに促進することで、休耕地を復活させ、畑で精を出す高齢者の雇用もこれまで以上に進めていきたい。そして、長寿という財産を、次の世代につなげていきたいと思っている。



製品化した村の特産品



## NPO法人ねおす

# 廃村炭鉱町にリピーター含め2万人 —住民25人の町を再生する取り組み—



理事 ● 宮本英樹

NPO法人ねおすの前身、北海道

自然体験学校NEOSは一九九二年に活動を開始した。当初は子どももの自然体験キャンプ、大人向けの自然講座と山岳登山をメインに、徐々に自然体験型環境教育を旗印に掲げ、その手法として「交流と学び×エコツーリズム」を実践してきた。

一九九九年、全国で最も早い段階にNPO法人化し、様々な事業を行っている。事業内容を以下にご紹介すると、

- 子ども自然体験活動、自然体験型アフタースクール、北海道サマーキャンプ、エコツアーの企画・実施
- 自然体験活動指導者養成、地域ガイド養成、社会的企業家創出研修、企業職員研修
- 自然学校の運営、国立公園の環境保全活動、都市農村交流コーディネート

ネット——などである。

ねおすが関わり、エコツーリズムの推進を通じて持続可能な地域づくりを目指した事例として、登別市ネイチャーセンター「ふおれすと鉱山」が挙げられる。

ここは一九七三年に閉山された鉱山の旧鉱山小中学校を再利用した施設で、市民が主体となり、行政が施設設備と運営費を提供し、地域外の専門NPOの力を活用する、協働の形で誕生した。

## 「ふおれすと鉱山」は 地域づくりの拠点にも

二〇〇一年、この地域のコーディネートネットとして、ねおすが企画・支援した際、この地域には特筆すべき自然がない、行き止まりで人々の行き来がほとんどない、自然に興味を持つ人が少なくマーケットが小さい、

といったさまざまな弱点があった。

これらの問題点を克服するため、資源分析の際に自然や史跡といった目に見えるものだけでなく、生活文化や風土、土地柄、気質などの目に見えづらい部分まで掘り下げて分析した。

地域が持つ「日常価値」を再評価し、それらをうまく利用し、運営方針やプログラムに採り入れた。

現在、「ふおれすと鉱山」では自然体験プログラムの実施だけでなく、地域づくりの拠点としても活躍している。

利用者や運営ボランティア、関係者が自己実現の機会とその責任を負う平等性を確保した結果、リピーターの獲得に成功。この結果、人口二十五人の登別市鉱山町に、年間約二万人が訪れるようになり、「自律的な施設運営」そして「交流」へとつながった。

「ふおれすと鉱山」の開館後、利用者としてプログラムに参加していたメンバーが中心となり、市民ボランティア「モモンガくらぶ」が誕生したが、利用者からサービスの担い手へと役割を変えていった。



子育て支援のプログラムも豊富



活動に必要な知識と技術を得る場の提供

二〇〇五年にNPO法人化し、二〇〇七年には「ふおれすと鉱山」の指定管理者として、地域コミュニティの再生に取り組み始め、現在は「鉱山からマチ場へ」をスローガンに、子育てサロンや観光ガイドの育成など、「マチ場」の地域づくりにも活動を広げている。

## 子どもたちに自然体験活動

ねおすではエコツーリズムの推進のノウハウをいかし、全国の子どもたちが夏休みに北海道で長期宿泊型自然体験活動を経験するプロジェクトも進めている。

当プロジェクトの推進にあたっては、首都圏のNPOや道内の鉄道会社、自治体や市民団体と協働ですすめ、子どもを安心・安全に長期に受け入れられるネットワークを地域でつくることで、地域内に新しい社会関係資本を再整備することを目指している。

## 八戸せんべい汁研究所

## 「八戸せんべい汁」を全国ブランドに

—B級ご当地グルメでまちおこし—



事務局長 ● 木村 聡

## 地元以外で知名度ゼロだった

せんべい汁は、肉や魚・たっぷり野菜などのダシ汁に、小麦粉と塩で作る鍋用の南部せんべい（おつゆせんべい）を割り入れて煮込む鍋料理。上手に煮込んだせんべいはモチモチ・シコシコとした歯ごたえて、意外な食感ほまるでパスタのアルデンテのよう。初めて食べた人から「ビックリ！でも旨い」と言われる、青森県八戸地方の郷土料理である。

二百年以上も前から食べ継がれているが、日常的に食べるありふれたメニューだけに、ほんの十年前までは県内でも八戸地方でしか知られない超マイナーな料理だった。

このせんべい汁を全国ブランドにして地元経済波及効果を起こし、地域を元気にしようと二〇〇三年に

市民有志が集まり、「まちおこしボランティア団体」を旗揚げした。それが八戸せんべい汁研究所である。

八戸せんべい汁研究所の構成員は煎餅屋でも飲食店でもない。会社員や自営業・主婦など、普段はせんべい汁とは関係のない本業に就く市民が夜や休日にボランティアで活動し、地元以外では全く知られていなかった八戸せんべい汁を活用して、地域を元気にすべく挑戦している。

活動はさまざまな企画による情報発信がメインであるが、基本的にお金をかけずに効果を引き出している。

例えば、CDが全国発売されカラオケも配信中の、B級ご当地グルメソングの草分けと言われる「好きだDear! 八戸せんべい汁」の企画も、今や国民的イベントになった「B

ー1グランプリ」の生みの親も、八戸せんべい汁研究所なのである。

特にBー1グランプリでは、料理の味ばかりでなく、毎年繰り出す八戸せんべい汁研究所流のおもてなし&パフォーマンスも評価され、過去六大会中三度のシルバーグランプリ（全国二位）と二度のブロンズグランプリ（同三位）獲得という偉業を成し遂げ、八戸せんべい汁を一躍全国ブランドに押し上げた。

## B級ご当地グルメで郷土料理を全国発信

安くて・美味しいから・地元の人たちに愛される食べ物「B級ご当地グルメ」を活用し、市民主導でお金を掛けずにユニークな発想と企画力により、話題性を高めた戦略的な情報発信で地域を売り込む。Bー1グランプリを契機に、そんな活動が全国的な動きになった。

## 八戸せんべい汁を知って

もらい、東北を訪れた時には本場の八戸に立ち寄ってもらい、せんべい汁以外の八戸グルメも食べ、呑み、



旅行者も八戸せんべい汁を買って帰る



B-1グランプリin姫路にも参加



八戸せんべい汁

宿泊して横丁や朝市も満喫してもらいたい。

今や、八戸せんべい汁の経済波及効果は年間五百六十三億円（二〇一〇年度・総務省調査）。地元客はもちろん、多くの旅行者が八戸せんべい汁を食べに横丁などを訪れ、豊富な食や地酒を堪能し、翌日の朝市や朝ぶろ、北三陸八戸の海岸などにも立ち寄り、最後は土産を買って帰る。八戸せんべい汁研究所は、行政や業界に頼りつつ放しになることなく、市民主導のボランティア活動から地域に元氣を取り戻そう、そんな想いを着実にカタチにしている。

## NPO法人遠野まごころネット

岩手県遠野市

災害支援から地域再生へ  
―被災各地でボランティア活動―

事務局ボランティア ● 柳澤 亮

## 遠野まごころネットの結成

岩手県遠野市。人口三万人弱。県南部・北上高地山間の盆地に位置する。柳田国男の「遠野物語」で知られる深い歴史と豊かな自然を持つこの都市で、東日本大震災の発生以降、ある災害ボランティア団体が活発な支援活動を展開している。筆者が所属するNPO法人・遠野まごころネットである。

二〇一一年三月十一日に発生した東日本大震災の影響は、北海道から関東までの広い範囲に及んだ。特に岩手県三陸沿岸地域は想定外の大津波により壊滅的な被害を受けた。

三陸沿岸市町と歴史的地理的に深い絆を持つ遠野市では、震災直後から公私の有志がそれぞれ独自に支援活動を開始していたが、未曾有の被

害を前に協調して支援することの必要性を認識。同年三月二十七日に結集して生まれたのが、遠野まごころネットである。

遠野まごころネットの活動は、震災直後のがれき撤去や物資配布など緊急支援から始まった。その後は緊急支援にとどまらず、被災者のニーズの調査と対応、カフェや足湯の提供などパーソナルケア的活動も行っている。

さらに、震災により破壊されたコミュニティの再生・失われた雇用の創出にも乗り出している。岩手県陸前高田市と大槌町の計三カ所にひらかれている「まごころの郷」(写真1)は地域の産業再生



写真1 岩手県陸前高田市・まごころの郷おさべの麦の芽吹き。以前はがれきが堆積していた(水谷格之撮影)



写真2 岩手県大槌町・まごころ広場うすざわにこの冬、オープンした飲食店。(柳澤 亮撮影)



写真3 岩手県釜石市で水路の補修をするボランティアたち(船田浩二撮影)

モデル兼住民のコミュニティスペースである。

大槌町内の「まごころ広場うすざわ」は、コミュニティスペースとしての機能に加え、飲食店の併設で雇用創出という役割も果たしている(写真2)。なおコミュニティの再生・雇用の創出はあくまで地元が主体であり、遠野まごころネットは人力や物資での協力で自立を促す立場であることを付け加えておきたい。

## 海外十数カ国からも参加

これまでに遠野まごころネットは大槌町、釜石市、大船渡市、陸前高田市、遠野市のほか、宮古市、山田町そして住田町で活動している。

本拠地・遠野市が三陸沿岸から五十キロほど内陸にあり、被災地まで比較的短時間で到達できる半面、震災の被害をほとんど受けていない点を生かしていることである。

活動の主力はボランティアだ(写真3)。ボランティアは、北海道から沖縄までの国内はもちろん、北米、ヨーロッパ、アフリカ、アジアの十数カ国からも参加している。その数は遠野市の人口の実に二倍近い五万人超である(二〇一二年一月現在)。

## 被災地に寄り添い復興支援

震災から十カ月余が経過した現在でも岩手県三陸沿岸の被災地は、まだ復興にはほど遠い状況にある。被災者支援のためにしなければならなことはまだまだ多い。

今後の遠野まごころネットは、国内外のボランティアを受け入れつつ雇用を併用することで長期的活動に耐えられる態勢を作りながら、被災者に寄り添い、復興そして地域再生を目指していく。

遠野まごころネット

(<http://tonomagokoro.net/>)

## NPO法人せんだい・みやぎNPOセンター

# 支えてきた場所を支え続ける ―多角的な活動で被災後の復興に寄与―

みやぎ連携復興センター事務局次長 ● 眞壁さおり

二〇一一年三月十一日に発生した東日本大震災は、仙台市に事務所を構える当センターにも大きな打撃を与えた。被害の全容がつかめないまま、押し寄せる緊急のニーズや相談にとにかく必死に応えるしかない不安な日々が続いた。

そして同時に、「被災地のNPO中間支援組織としてどうあるべきか、何ができるのか」自問自答する

苦しい日々でもあった。

今回「地域づくり総務大臣表彰」受賞という光栄にあずかり、震災後一年を改めて振り返るとともに、当センター発足から十四年の年月についても振り返る機会とさせていたいただきたい。

### NPO活動の基盤強化を図る

せんだい・みやぎNPOセンター

は一九九七年

十一月に発足した。当時、

阪神淡路大震災でボラン

ティアの活躍が注目された

ことを追い風に、「特定非

営利活動促進

法（いわゆるNPO法）の成立に向け、当センターとしても国や県に政策提言を行っていた。

一九九八年に法律が成立、九九年七月にNPO法人格を取得した。「市民社会の発展に寄与する」という大きなミッションを掲げ、幅広く地域や分野を越えたNPOの活動基盤強化を図り、企業や行政とのパートナーシップの形成を促進するための事業を展開してきた。

市民活動団体向けのマネジメント講座、NPOの活動に関する情報発信や相談業務など、また、自治体支援や企業のCSR活動支援、コミュニティ・ソーシャルビジネス支援などである。

また、日本初の公設民営型の市民活動サポートセンターである仙台市市民活動サポートセンターを始め、多賀城市や名取市でも施設の運営を任されている。

しかし、NPO法の施行から十年を迎えた頃、「NPOは本当に社会を変えられるのか」といった議論が全国で展開された。人材、資金不足にあえぐNPOはまだ多い。

NPOがもつ組織力、政策提案力を高めていくためには何が必要なのか。同じ頃、公益法人制度改革も進められ、NPOの存在意義を改め

て問い直す時期でもあった。

そして、二〇一一年三月。報道でも盛んに取り上げられているが、今回の震災においては震災直後から、たくさんのNPOが被災地で迅速な支援活動を展開した。これまで主に海外での活動を行ってきた多くのNGOも、その豊富な経験を活かした支援を行っていた。

### 復興まちづくりに今後も貢献

阪神淡路大震災が起きた一九九五年が「ボランティア元年」だとすると、二〇一一年は「NPO/NGO元年」だと言われる。大震災によって十七年の間に起きていた社会の変化を実感することになったとは思ってもよらなかった。

当センターは、「社会課題解決に必要な市民力を高めることを通して復興を加速させ、市民参加・協働型の社会を仙台・宮城の地で実現することを目指す」とミッションを再定義し、これから長年にわたり続く、復興まちづくりに貢献する決意を新たにした。

被災地のNPO中間支援組織として、今まで食糧、エネルギー、人材の供給地として日本を支えてきた場所「東北を支え続けるために、不断の努力を続けていきたい。」



2011年8月 石巻での支援者勉強会の様子



2011年12月 気仙沼での支援者ワークショップの様子

## NPO法人石巻スポーツ振興サポートセンター

宮城県石巻市

高齢者やスポーツ弱者を支援  
―被災児童らに運動具の贈呈活動も―

理事長 ● 松村善行

## スポーツを通じたまちおこし

NPO法人石巻スポーツ振興サポートセンターは、「いつでも・だれでも・どこでも、スポーツの喜びを」を合言葉に、平成十五年の設立以来、石巻地方最初の総合型地域スポーツクラブとして、地域におけるスポーツ環境の改善やスポーツを通じたまちおこしに取り組んできた。「自分の意思で自由に体を動かす」というスポーツ本来の意義を大切に



ボール遊びを通じた親子のふれあい増進



被災小学校を会場にキックベースボール大会

し、結果重視の競技スポーツではなく、スポーツを楽しむ過程そのものを重視しながら、とりわけ高齢者、障がい者、幼児などのスポーツ弱者に焦点を当てた運営を心掛けている。具体的プログラムは、サッカースクール、地域交流フットサル、運動の苦手な子供を対象としたスポーツ遊び教室「わんぱくスポーツプログラム」、幼稚園・保育所などへの出前ボール遊び教室、知的障がい者を対象にした総合スポーツクラブ、障がい者マリンスポーツ体験事業など。

近時はウォーキング事業に力を入れ、楽しみながら歩くことで地域の歴史・自然・食材といった財産を再確認してもらい、こもりがちな高齢者が外に出て、仲間を見つける

機会となることを企図している。

我々の事業所は北上川河口に程近く、先の東日本大震災では一階天井近くまで達する津波の直撃を受け全壊の被害を受けた。

スタッフは波の上で一晩を明かし、翌日からはじめたヘドロやがれきの撤去作業は、当初は事務所周辺を行っていたが、次第に、手伝いに来てくれた多くのスポーツ関係者等を案内しながら、それまで見ず知らずだった方のお宅などにお伺いするようにになり、また、寄せられた物資の仕分け・配布活動を行うなど、さながらボランティアセンターのような役割を担っていた。

## 被災児童にスポーツの機会提供

全国からの多くの支援者に助けられながら街の復旧が進んでくると、こうした復旧ボランティア活動と並行して、被災児童らにスポーツの機会を提供する活動も始めた。

被災直後こそ、みな生きるのに必死で他のことには目を向ける余裕がなかったが、こうした時こそスポーツや文化の持つ役割、力が必要であると実感したからである。

体育館、運動場…元々スポーツを楽しむ場であった所はことごとく被災し、がれきに埋もれるなどしてお

り、当時はとにかく運動する場所がなかった。それでも、少しでも使える広場があればがれきや石を片付け、トンボで地ならしをし、手作業で整地して子どもたちとボール遊びなどを行った。

手作りのスポーツイベントも数多く開催し、とりわけ津波の被害を受けた小学校の校庭で行ったキックベースボール大会のイベントでは百人を超える子どもたちが参加し、素晴らしい笑顔を見せてくれた。

## 「スポーツの力」信じ復興の一助に

また、日々ボランティアの皆さんと活動した経験から、「今」この現状をとにかく自分の目で見てもらうことが重要であると考え、がれきの残る被災地をあえて歩いてもらう「復興ウォーキング」も実施した。

現在、石巻では多くの方が狭い仮設住宅での暮らしを余儀なくされている。避難所と違い、自分の空間に閉じこもってしまいがちな仮設住宅で、外に出て健康づくりを行うとともに、仲間を見つけコミュニケーションを形成する手段としてスポーツが果たす役割は大きいと考える。今後はこういう側面に注目しつつ、「スポーツの力」を信じて復興活動の一助となるよう前に進んでいきたい。

# 社会的弱者への雇用支援を継続 ―震災後は被災弱者の支援に力注ぐ―



代表理事

● 布施龍一

## 「社会福祉取引商品」の普及活動も

石巻市内で飲食店を経営していた筆者が、潰瘍性大腸炎という難病にかかったのを契機に、社会的弱者のための支援活動に専念するようになったのが、団体設立のきっかけである。

社会的弱者を対象にした雇用支援に重きを置き、高齢者や障がい者、

ニート、ひきこもり、学生、そして地域住民が協働するという、地域が地域を支える取り組みを中心に活動している。

就労の場を与えるソーシャルファーム事業では、生産された商品を「ウェルフェアトレード商品（社会福祉取引商品）」として、一般企業との協働という形で販路を開拓。このウェルフェアトレード商品の普及活動と



農作業に携わる会員の若者たち



巡回訪問先のご夫婦と談笑する

にも、障がい者や高齢者、ひきこもり・ニートなどの社会的弱者を対象に、雇用支援に力を入れてき

た。  
現在は、自ら被災しつつも、被災地で身よりのない在宅避難者や行政の支援の届きにくい半島部の避難者などの被災弱者に対し、独立して継続した支援を行っている。

## ソーシャルファーム事業で地域を巻き込んだ活動

二〇〇九年に石巻市鹿又の農家から十アールの田んぼを提供してもらい、地元住民や県内各地の有志と一緒に会員の若者たちがコメ作りを行った。「ニート米」と銘打ったところ全国から大きな反響があった。

ここで作業した若者たちも全員就職を決めたため、二〇一〇年は名前を変え、「もうニートとは言わせ米」として出荷。震災後の今年は、農業生産法人アルコバレーノファームを立ち上げ「復興米 Niiji 虹」を販売、わずか一日で完売となった。

農作業の難しさはもちろんのこと、植物の生命力の強さを実感してもらい、彼らの「心の成長」にもなったのではないだろうか。

## 支援は「場所ではなく人」にするもの

他方、障がいを持っているため避難所や仮設住宅に行けず、仕方なく在宅避難を強いられる被災弱者に対し、巡回訪問を行い必要な支援

を行ってきた。これらを通じ、被災地の復興・復旧支援に一役買った。団体活動指針は「支援は場所にするのではなく、人にするもの」。一人一人の意見を熱心に聴きながら、真摯な姿勢で応えていった。

支援を受けた人からは「まさか本当に来てくれるとは思わなかった」「行政や他の団体は巡回はするが、欲しいものを言っても来てくれないので助かった」など感謝の声が続々と届いている。

年末年始は、あけおめ（あけましておめでとう）の意）巡回訪問を実施。仮設住宅では親戚の家に招かれる人が多いものの、親戚一同被災し孤立してしまう人も。だからこそ、巡回したい！と奮い立ち、三が日は市内を走り回った。

社会的弱者、被災弱者の支援はまだまだ足りない。これから「人を支援する」という姿勢を忘れず、人づくり、地域づくりを実践していきたい。



在宅避難世帯へのアンケート調査に動き回る

## いきいき深山郷づくり推進協議会

# 地域挙げて伝統技術を守る

## 「深山和紙」を継承し、地域の発展に活用



会長 ● 須田 信一

山形県の南部、置賜地区（かつての米沢藩）の最北端に位置する本地域は、地名の示すとおり山あいの地域である。室町時代の建立とされ国指定重要文化財である深山観音堂や、県指定無形文化財の深山和紙、深山焼（陶芸）・獅子舞など農村生活に根付く歴史や伝統を現在まで引き継いで来ている。

人口約二百八十人、戸数約八十戸、高齢化率三〇・二％と、ご多分にもれず過疎の地域であるが、行政の支援を受けながら地域を存続するため様々な取り組みを行っている。

### 地域内全戸で村おこし

今後の農業問題の検討をきっかけに、平成九年度に地域内の全戸が加入する「いきいき深山郷づくり推進協議会」を立ち上げた。

「いきいき深山郷づくり計画」と銘打った地域づくり計画（現在二期計画）を策定し、看板設置や花いっぱい運動などの景観整備、耕作放棄地の活用、直売所開催、農業体験や深山和紙の伝承など、地域資源を活用した地域づくり活動を行ってきた。また、本地域に伝わる深山和紙、深山焼をはじめ、和紙人形・紅花染め・わら細工・竹細工など町内でできる工芸



工芸体験祭りー絵付け和紙



農家民宿「のどか村」



会員紙漉き講習会



楮刻み作業

活かした体験を組み合わせたイベントの「伝統工芸の村まつり（現・しらたか工芸体験まつり）」を平成三年度から、継続して開催している。町内外にPRする場となっているほか、会員のほぼ全員が関わり地域の結束を図る場にもなっている。

そこでの好評価や経験を基に、平成十三年度に築約百六十年の茅葺農家を活用した農家民宿「のどか村」を開業した。地域資源である食・技・農・自然・人など様々なものを通して交流を図っている。

### 地域の宝を未来につなぐ

米沢藩の名君「上杉鷹山」も奨励し、県指定無形文化財になっている深山和紙は、かつて数十軒もの紙漉き場が存在していたが、和紙の需要減少や生産の手間、経済的な問題から現在ではたった二カ所まで激減

し、その技法を守る後継者の育成が課題であった。

そこで協議会として、耕作放棄地を有効活用し原材料となる楮（こうぞ）の畑を整備したほか、楮の栽培・管理から収穫、加工、和紙生産まで技術継承を含めてほとんどの工程を地域ぐるみで行い、深山和紙を保全・維持する取り組みを行っている。

これまでの取り組みで、継承されてきた地域資源を守り、日常の農村景観を充実させることが、地域の魅力となることを会員が認識するようになってきた。

これからも地域の宝である深山観音堂や深山和紙の保存伝承、しらたか工芸体験まつりの開催、農家民宿「のどか村」の運営などを充実させ、地域を盛り上げていきたい。

## 逢瀬ゆめくらぶ

# 地域の応援で続けるふるさとづくり — 地域振興を民主導で展開 —



代表 ● 加藤満喜子

### 豊かな自然と農業資源を活かす

郡山市は、人口約三十四万人の都市である。私たちが活動するふるさと逢瀬町は、市の中心部から西方に位置する農村地帯で、少子高齢化が進行する地域である。

そのような状況に危機感を抱き、

「逢瀬町の豊かな自然や農業資源を活かし、何かできないか」との思いから、平成七年に始まったのが逢瀬ゆめくらぶである。活動の中で、自分たちが育てた安全な農産物を消費者の方々に届けたい、と考えた。

私たちは、設立当時から守っている約束ごとがある。それは、「自分たちが楽しければ、参加者も楽しいはず」のモットーである。運営に悩んだとき、私たちはこの原点に帰ることになっている。

だから、規模を大きくしたいという思いもあるが、行政等の援助を受けることなく、できる範囲での実施を心がけている。それが、十七年間も継続できた理由の一つだと思っている。

### 交流が一番の栄養

会の活動は、①農業体験、②夏祭り、③他団体との連携・協力——が三本柱だ。

農業体験では、無添加の手づくりりんごジュース搾り教室や自家製味噌づくり交流会、市内産のソバ粉を利用したソバ打ち体験交流会を実施している。

また、一大イベントである夏祭りでは、地域の食材を利用した料理を並べ、ビニールハウスでコンサートを実施するなど、里山ならではの催

しにこだわっている。

他団体との連携・協力では、ホテル鑑賞会や県の天然記念物の浄土松公園で行う祭り、地域の文化祭等に参加・出店し、つきたてモチやけんちん汁などを提供している。

また、都市住民の田舎暮らしを進めるための団体である「逢瀬いなか体験交流協議会」も発足会員として参加している。これらの催しにより、参加者と交流できるのが、一番の栄養となっている。

設立当初の会員は、稲作農家七戸、十四名だったが、活動内容がグリーンツーリズムや農産物直売所の経営などに枝分かれした。現在、正会員、準会員合わせて二十二名が会員となっている。

このような中、充実した活動を継続できた大きな要因として、約五十名のサポーターの存在がある。活動に賛同していただき、年千円の会費で加入している。「俺たちは、ゆめ

くらぶの応援団！」と、温かい目で見守ってくれている心強い仲間だ。

### 復興にもうひと踏み張り

周知のとおり、昨年の三月十一日、東日本大震災が発生し、福島県は地震被害と放射性物質の被害に苦しめられることになった。風評被害に苦しむ仲間も多い。

ゆめくらぶは、どうなるのか？ 私も不安な日々を過ごしたが、会員からは「こんな時だからこそ、活動を続けよう」という意見が出された。

明治初期、郡山市で国策事業として行われた安積開拓には、全国からの入植があり、また、多くの市民も参加した。先人が困難を乗り越え開拓を成し遂げ、本市を全国有数の農業都市としたように、私たちも、もうひと踏み張りして復興に立ち向かい、誇れるふるさとを子どもたちに引き継いでいきたいと考えている。



ゆめくらぶの仲間達たち



ビニールハウスの夏祭り



餅つき体験

# 町復興のシンボルとして活動 ―「なみえ焼そば」が町民のきずな―



事務局長

● 菅家清進

「三年後に開通する高速道路を活用して外から誘客できなければ、地元・福島県浪江町は衰退する」。そんな危機感があつた。町活性化のきっかけになるような、魅力ある「何か」が必要だった。

太平洋側に位置し、東西に長い町は、海と山の幸が豊富。だが、それらを楽しむには季節が限られるため、通年で誘客可能な観光資源が理想的と考えた。何を売りにするか。

## 町民が食べている麺の太さに着目

町内を探したところ、町で食べられている焼きそばの麺が太いことに気づいた。最も太いもので約六ミリ。「細麺を使用している」という飲食店でも、近隣町村で食べられている麺より間違いなく太かった。「他地域と差別化できる」と思った。

二〇〇八年、福島県浪江町商工会青年部が主体となり、焼きそばを通じた町おこし活動を開始。町で親しまれている中華麺の太麺、モヤシ、豚肉を使った甘めのソース味焼きそばを「なみえ焼そば」と命名した。

しかし、「なみえ焼そば」の存在が周知されなければ、無いも同じ。重要なのはメディア戦略だ。団体名を「浪江焼麺太国」とし、ナポレオンを意識して頭の上に焼きそばを乗せた、独特のファッションの太王（だいおう）を中心に広報活動した。

新聞やテレビなど多数のメディアに紹介されたことが、大勢の人に知ってもらいきっかけになった。焼きそばを提供する町の飲食店は、平日は町民で満席。週末は閉店していた飲食店も開店し、町外の観光客が列をつくるようになった。

また、町の伝統工芸品・大堀相馬焼の皿とのコラボも実現。皿には開運成就を意味する九頭の馬が描かれており、「なみえ焼そばを食べると何事も馬九行久（うまくゆく）」というストーリーに仕立てた。

町の女子中高生による「NYTS（ナイツ）」というアイドルユニットも結成。町と焼きそばをテーマにした歌でPRに役買っている。こうした取り組みを経て、二〇一〇年、B-1グランプリ厚木大会への参加を果たした。

## 震災後、避難所などで焼きそばの炊き出しも

だが、町内外から観光客を誘致し交流人口が増えてきた矢先、東日本大震災が町を襲った。多くの家屋が倒壊し、沿岸部は約一キロが津波にのまれた。いまだ行方不明の仲間もいる。さらに、福島第一原発事故で全町民が避難する事態になった。

震災から十日後。絶望の中でも町

のために自分たちができることをしようと、県内の避難所などで「なみえ焼そば」の炊き出しを始めた。

まちおこしに取り組んできた団体として、町民の心をつなぎ止めたい一心だった。子どもも高齢者も「これが食べたかったよ、ありがとう!」と声を掛けてくれた。各地のB-1仲間たちからも、熱く力強い支援を受けた。

## B-1グランプリで4位に

この年にもB-1グランプリ姫路大会への出場が叶い、第四位に食い込んだ。町民から「浪江町はなくなれない。私たちの心にあるから、食べれば思い出せる」という言葉ももらった。それが何よりも嬉しかった。「絆」を感じた瞬間である。

「なみえ焼そば」を町復興の象徴として、いつか町民が安全に帰還する日まで活動を続けていきたい。そしてまた、ふるさとを盛り上げたい。



東北支部B-1グランプリin青森



第5回B-1グランプリin厚木



第6回B-1グランプリin姫路

# 鉄道とともにまちの活性化めざす

## ―廃線の危機から存続・利用活動を展開―



団長 ● 佐藤彦三郎

### 応援団と海浜鉄道の発足

ひたちなか海浜鉄道湊線は、水戸市に隣接するひたちなか市のJR常磐線勝田駅と海岸部の阿字ヶ浦駅を結ぶ十四・三キロの盲腸線。ほぼ中間の那珂湊駅に本社や車両基地があり、高校生を中心にここからの乗降客が多い。東京から百キロ圏内に入りながら、気動車が田園風景の中を走る姿は、昭和の郷愁を誘う鉄道として人気が高い。

湊線は来年末には開業から一世紀の節目を迎える。だが、利用者は昭和四十年年度の三百五十万人をピークに七十万人台にまで年々減少、経営してきた茨城交通は平成十七年十二月、地元ひたちなか市に「二十年三月限りでの廃線」を打診した。

翌十八年に表面化すると、ひたち

なか市那珂湊地区の二十三自治会とひたちなか商工会議所など関係団体は、「足の確保」だけの観点にとどまらず、湊線は那珂湊地区のまちづくりに不可欠な地域財産であり社会資本だとして、十九年一月に「乗って残そう湊線！」を合言葉に、おらが湊鐵道応援団を結成した。

一方、市と県は「廃線待った」の住民の声を背景に、十九年九月には市と茨城交通が出資する第三セクターの新会社によって、翌二十年四月一日から新たに営業を継続することと最終合意した。新会社名と新社長は全国公募によって決定した。

応援団の現在の会員（団員）は約二千二百名。沿線の自治会や商工会、全国の鉄道ファンなどが会員となり、湊線を支えている。

主な活動は、①那珂湊駅の応援団

サービスステーションの運営と観光案内、②沿線の商店・飲食店・宿泊施設等と連携した「乗車特典サービス」実施、③引退した気動車を利用した那珂湊駅構内でのミニ鉄道博物館の管理運営、④応援団写真部撮影によるポストカード発行と

写真展の実施、⑤沿線でのアトイ

ベント開催、⑥沿線自治会等による

駅清掃や植栽・除草作業、⑦沿線神

社等の協力を得て元日早朝の初詣・

初日の出列車運行――などだ。

### 湊線の復活はこれからが正念場

地域を挙げての利用促進運動と行政の支援により、減少していた利用客は十八年度に底打ちし、二十二年度には八十万人台まで回復の見通しが立った矢先、東日本大震災が発生した。ひたちなか市は震度6弱の揺れと沿岸部は最大約四メートルの津波に襲われ、湊線も全線が大きな被害を受けた。七月二十三日の全線の運行再開まで四カ月以上の運休、被害総額は約三億円と小さな鉄道会社にとつては大きな試練となった。

応援団は「絶対復活させるぞ！湊線」を合言葉に、いち早くフェイスブック等で被災状況や復旧状況を発



自治会と応援団による駅ボランティア清掃



はま菊除草作業

信。また、ふっか（復活）壺」と名付けた募金の壺を駅に置き、義援金の呼びかけや、運休中にしかできない大がかりな除草作業や植樹を沿線駅で行うなど、運行再開に備えた。

茨城交通から廃線の打診があった当時、住民からは「それも仕方ない」という声も聞かれたが、今度は違った。「なくては困る」「運行再開が待ち遠しい」など、子どもから高齢者まで駅に設置した「応援ノート」に激励の言葉が続いた。

湊線沿線には、国営ひたち海浜公園、アクアワールド大洗（水族館）、那珂湊おさかな市場などの観光地を有するが、その賑わいが那珂湊地区に十分に波及していないのが現状だ。しかし、住民・鉄道会社・行政が一体となった取り組みで、行楽客が那珂湊のまちを散策する姿も徐々に増えてきた。湊線の復活はこれらが本当の正念場である。

## 取手アートプロジェクト実行委員会

茨城県取手市

# 取手を「アートの街」として発信 —地域型アートプロジェクトの効果と展開—



実施本部 事務局長

● 羽原康恵

取手市は、茨城県の南端に位置し都心までJR常磐線で約四十分の距離にあり、十一万人弱の人々が暮らす、都心通勤者のベッドタウンとしての機能を果たしてきた郊外都市である。その取手を舞台に一九九九年、取手アートプロジェクト（TAP）はスタートした。

### 東京芸大キャンパス開設を機に展開

市内に立地する東京芸術大学取手



ガスホルダーデザインコンペによる環境整備



役目を終えた終末処理場で展開した現代美術作品群

設、生活空間——年ごとにテーマを設定し、街の各所を使い、その場に人を引き合わせ、街の異なる見え方を提示する。街に暮らす様々な表現者に出会ったきっかけをつくる。そうして取手アートプロジェクトは取手の街の魅力をいわば耕してきた。

校地内に先端芸術表現科が九九年設立されたのを機に、駅前中心市街地開発にあたりパブリックアートの設置を市から依頼された同科が、ただ作品を置くだけの「モノ」ではなく、形のない「コト」としてのプロジェクト実施を市側に逆提案したことで、芸術表現が街の各所に展開するアートプロジェクトが生まれた。取手の自然や歴史的文脈、遊休施設、生活空間——年ごとにテーマを設定し、街の各所を使い、その場に人を引き合わせ、街の異なる見え方を提示する。街に暮らす様々な表現者に出会ったきっかけをつくる。そうして取手アートプロジェクトは取手の街の魅力をいわば耕してきた。

同プロジェクトは、市民と東京芸術大学、行政の三者共同によるプロジェクトだ。発足よりTAPは主要事業として、全国から作品プランを募集する「公募展」と、取手在住作家の活動を紹介する「オープンスタジオ」を隔年で開催してきた（初年度のみ両事業を同時開催）。

加えて、環境整備事業として、壁画プロジェクト、ガスタンクデザインコンペなど、地域の生活環境に芸術を取り入れる都市環境整備をし、また人の育成による芸術環境整備として、人材育成事業、こどもプログラム・教育機関へのアウトリーチ活動などにも取り組んできた。

さらに近年は、韓国をはじめ、近隣アジア諸国との国際交流事業としてのアーティストの相互派遣、調査事業等のほか、取手市近隣で活動する芸術文化団体の支援を行う中間支援事業も行っている。

### 地域の幅広い住民が参加

活動十二年目を迎えた二〇一〇年度には、事務局機能を担うNPO法人を発足させるとともに、「一年のうちの数日間」に会期を限定したフェスティバル型の事業形態から、通年・複数年をかけてプロジェクトを展開する、地域社会の「日常」に

より近い形での事業形態へのシフトに着手した。郊外都市での新たなライフスタイルを、様々な世代・興味・立場の参加者とアーティストらが生み出していく試みである。

これらの事業の運営は、現場を担う多世代スタッフが会議の場での意思決定する現場主導の事業運営を行ってきたおり、取手に愛着を持ち、取手を面白くしたいという意識を持った専門家や行政などの助言や支援を得て、事業計画が実現されていく。

取手アートプロジェクトの効力は、その事業実施を通じて確実に増加してきた人的資源である。表現活動を行う若手アーティストたちが取手に移住し、芸術活動を応援する市民らが運営するアートのスポットが増加している。取手の外でもTAPを経験したアーティストやスタッフが、首都圏をはじめ各地での芸術文化活動の実働メンバーとして多数活躍するなど飛び火的事例もある。

これらの取手という土壌が持つ人的ネットワークを活用しながら、表現を介在させることで既存の枠を超えたコミュニケーションを育み、現代を生きる上での「新たな価値観」を創出するインキュベーターとしてこの街を醸成していくことをプロジェクトは目指していく。

# 高齢者の生きがいづくりを後押し

## ―社会参加促す「ボランティア養成講座」実施―



代表 ● 狩野雄一郎

八王子センター元気（以下センターと称する）は、八王子市の中心市街地に近い大横保健福祉センターに事務所がある。冬晴れの窓外に目を向けると、東には多摩地域随一のつぽビル「サザンスカイタワー」、西には年間二百五十万人が訪れる高尾山、その向こうに富士山が見えるロケーションに位置している。

センターは、高齢者の生きがいのある生活と地域の支え合いの仕組みの構築を目的に、多くの高齢者が地域活動に参加できるよう八王子市と協働で運営している。

### 活動の事例紹介

主な活動は、特技を持つボランティアの発掘・登録と、登録者に活動の場を提供するための利用者開拓を仲介するコーディネートである。

週三日、会員であるコーディネーターが交代で、利用者と派遣講師を仲介するコーディネートを始め、利用者からの電話などに対応している。人材発掘と利用者開拓は事業発展のための車の両輪であり、センターの最も重要な活動といえる。しかし、最近になり利用申し込み数に対し派遣ボランティアが不足しはじめたので、市民を対象に二種類のボランティア養成講座を開設した。その講座内容をご紹介します。

「傾聴ボランティア養成講座」  
平成十八年六月に第一回を開講し、昨年までの六年で八回実施。この間の修了者は三百五十九名、ボランティア登録者は二百八十七名、活動者は昨年十月現在二百四十名に上っている。

活動場所は、高齢者福祉施設



ふれあい作品展の様子



ボランティア養成講座（折り紙）



傾聴ボランティア懇談会

を始め在宅高齢者など幅広く、五十六カ所を超え、ボランティア一人あたりの月の傾聴活動回数は平均二・四回である。

講座開始から受講者をグループに分け、グループごとに世話役を付け、講義、現場実習（二回）、修了後の登録、施設への配置、その後のアフターケア等きめ細かく対応しているのが功を奏し、いまや傾聴ボランティアはセンターのメイン活動となった感がある。

### 「ボランティア養成講座」

高齢者福祉施設の利用者は、作業療法効果のある手工芸品の制作を楽しんでくれることが多く、近年センターの登録講師が払底する状況が生じてきている。このため、人気のある手芸等のボランティア講師を養成するため、昨年六月から（別表）の内容で講座を開講した。

開講後、毎月一回開催し、本年三

月に十回の講習が修了する。修了後にはボランティア登録を行い、施設等で活躍していただく予定である。

### 背中を押してあげる

前記二例が示すように、元気高齢者の社会参加を促していくには、これまでのような自発的な申し出を待っているのではなく、これからは、ボランティア活動の身を具体的に提示して、講座開設などで呼び掛け、背中を押してあげ、ボランティア活動の楽しさを実感してもらえようという取り組みが必要であることを痛感している次第である。

〈別表〉

| 講座名        | 受講者数 | 期間                     |
|------------|------|------------------------|
| 折り紙        | 20   | 毎月、修了式を予定。<br>6月1日から開講 |
| 絵手紙        | 12   |                        |
| 健康音楽       | 14   |                        |
| 福祉レクリエーション | 12   |                        |
| 布草履・指編み    | 10   |                        |
| ちぎり絵       | 8    |                        |
| 簡単編み物      | 10   |                        |
| 計          | 86   |                        |

# 廃村寸前の限界集落を再生へ —中越地震後の息の長い活動成果—



代表 ● 山本浩史

## 中越大地震の発生

平成十六年十月二十三日、新潟県中越地方にマグニチュード六・八の大地震が発生した。十日町市の北東部に位置する山村の池谷・入山地区も甚大な被害を受け、家屋は全半壊、道路、田んぼ、神社の鳥居が崩れ、ムラ中がひび割れた。

十歳を超える高齢者がほとんどの池谷は「もうムラをたたむしかないのか」という所まで追い詰められた。昭和三十年代、池谷は三十七戸・二百十人以上、入山は十五戸・九十人以上が暮らしていた。かつて「飛渡第一小学校池谷分校」には最多七十人以上の子供が通学し、小正月、盆踊りなど様々な行事が年間を通じて行われるにぎやかなムラだった。高度成長期に入ると、地場産業の



棚田やブナ林が美しい池谷地区



必ず行われるボランティアとの交流会



都会にはないフィールドがある

絹織物産業が盛んになり、工場のため町場に引っ越す人も増えていった。同時に林業の衰退や「コメ余り」による「減反政策」で、山村農家は厳しさを強いられた。

その結果、戸数・人口は激減し、入山は平成元年に消滅し、池谷は平成十六年の中越大地震後に戸数六戸・十三人となり、「限界集落」化はますます進行した。

## ボランティア受入れ団体を組織

このとき、国際協力NGO「JEN」の協力により、震災復興支援を目的に都会からボランティアが通年駆けつけた。当初、住民は「ボランティアって何だ？」と懐疑的だったが、見ず知らずのボランティアが村のために汗水流して手伝ってくれる姿を見て、住民の意識も少しずつ変わり始めた。

一方、「手伝いに来たはずが、逆にムラの『人』や『自然』に元氣をもらった」と多くのボランティアの方が感想を語った。住民とボランティアの心ふれあう交流から少しずつムラに活気が戻り、住民は希望を持ち始めた。

ボランティアの提案で、山の湧水で作る棚田の魚沼産コシヒカリを「山清水米」としてブランド化し、直接

販売も立ち上げた。震災で壊れた集会所の修復に多額な寄付を申し出てくれる大企業の創業者も現われた。

地元住民を中心にボランティア受け入れの「十日町市地域おこし実行委員会」を組織し、JEN、NPO法人 棚田ネットワーク、企業等と連携し、当初考えられなかった展開が始まった。ムラでは「もう十年地震が早く来ればよかった」と冗談を言うまでになった。

## 子供を含む5人が移住、集落継続へ

集落の「ムラを残したい」という思いは、通い続けるボランティアに通じ、平成二十二年二月「地域おこし協力隊」に応募して移住した三人家族に続いて、平成二十三年春には若い女性二人が移住し、限界集落ではなくなった。ある大学の先生は「奇跡の集落」と表現された。

今後は、移住者の生計の確保と集落を受け継ぐ仕組み作りが重要になる。中心となる「十日町市地域おこし実行委員会」NPO化の書類申請も完了し、認可を待つばかりだ。

「中山間地の問題は都会に住む人の課題でもある、百年先を見据えた地域モデルを都市住民と協働で作ろう」という呼びかけに、確かな手ごたえを感じている。

## 全日本大学女子野球選手権大会 魚津市実行委員会

女子スポーツ振興は市民の誇り  
—全国大会25周年、発祥地の取り組み—

実行委員長

● 若林忠嗣

「魚津の、わが洗足学園短期大学に、女子の野球部が設立されたのは、今年（昭和五十六年）四月のことであつた。歴史というもことごとしいが、発足というような『事始め』は、時が経つととかく伝説的な尾鰭がつくものだから、見聞きしたところを書き留めておこうと思う」…。

このような書き出しで始まる池田彌三郎氏最後の著書「魚津だより」によって、文学的に紹介された「大学女子野球」が産声を上げたのは、神戸の地。昭和五十六年六月六日（土）午後、この時である。

## 「マドンナたちの甲子園」

池田彌三郎先生の始球式で誕生した二大大学（神戸山手女子短大 vs 洗足学園魚津短大）による大学女子野球が六年を経過して、昭和六十二年八

月、参加大学八大学（帝塚山大、跡見学園女子大、神戸山手女子短大、金沢学院大、洗足学園魚津短大など）、百八十四名の選手たちが参加して、第一回全国大会が魚津市で開催された。

翌年の第二回大会は地元、富山医科大学と富山女子短大等四校が加わり十二大学の参加となった。その後、回を重ねるたびに参加校が増え、平成十一年の第十三回大会では三十大学、約六百人の選手が魚津に集まった。第一回から二十五年を迎える現在、「マドンナたちの甲子園」とも称されるまでに至った。

この大会の特徴の一つは、市民ボランティアと各種団体・行政で構成される実行委員会と選手たちによる学生委

員会で運営されていることである。最近、魚津市では二人の女性審判員（市民）も誕生しており、将来は大学生や卒業生が女性審判員として活躍する大会になるだろう。

二つ目は、野球以外の市民との交流である。前夜祭において市民が美味しい地元の味で選手達をもてなし、選手達はお礼に若いエネルギーを発散するがとき「歌やダンス」を市民に披露する。

## 広がる市民と選手たちの交流

また野球場では地元住民が自分の畑で取れたブドウ、スイカ、ウリ、トマト、キュウリなど「新鮮な味」を持ち寄り、選手やその家族、応援に来た卒業生の皆さんに振る舞う。そこで負けて泣いてくる選手、勝って笑顔の選手と市民との新たな交流が生まれる。

三年前（平成二十一年）のことだが、八連覇を目指し、魚津で合宿を行い準備万端の日本体育大学が、準決勝で初参加の大阪体育大学に「0-1」で敗れた。三位に甘んじた彼女たちは悔しさで一杯だったと思う。

その彼女たちが閉会式後、両ベンチの掃除を始めたのである。八連覇に勝るとも劣らないこの行動に、喝采を送りたい。「勝つより負けたときの方が多くを学べる」と言われている。このとき彼女たちは、いつもより多くのことを吸収し、翌年は挑戦者として、決勝戦のグラウンドに立ち、栄冠を勝ち取ったのである。

誕生から三十年。幾多の難局や地元洗足学園魚津短大が閉校という危機を乗り越え、今日まで存続してきた意義を、ここに見つけたと思う。間違いなく、選手たちは本大会の歴史とともに心技体で成長している。



優勝が決まった瞬間—日本体育大学—



地元住民との交流



試合の様子

# NPO法人田原菜の花エコネットワーク

愛知県田原市

## 菜の花を地域資源、ブランド化 ―市内百力所に「菜の花畑」、遊休農地解消にも―



理事長 ● 安田和司

### 農業産出額全国一の地域

田原市は、愛知県の南東部渥美半島のほぼ全域に位置し、北は三河湾、南は太平洋、西は伊勢湾と三方を海に囲まれた自然環境の豊かな地域である。農業、工業、水産業等が盛んな産業都市で、特に花き、露地野菜、畜産などを中心とする農業は、農業産出額全国一（平成十八年）である。

しかし、露地栽培型農業周辺の農地は有効利用が進んでいるものの、施設園芸型農家周辺の農地では、施設の作業に手がかかるため有効利用が停滞し、全体として遊休農地が年々増加していた。そのため、農業委員会では平成元年から遊休農地の実態調査を開始した。

条件の良い畑は既に担い手が野菜等を作付けしているが、条件の悪い

ところは遊休農地化している。雑木などが生い茂っているような農地、道路の残土や碎石等が入っている農地のみならず、コンクリート等大きな石が入っている農地もある。

荒れた畑（農地）に対し、平成十一年度に農業委員自らが行動を起こし、地権者に頭を下げて「荒れている畑を貸してくれないか」と相談した。借りた農地の石を拾い、草刈りを行い、早咲きの菜の花の種をまいた。

### 荒れた農地で「菜の花エコプロジェクト」を推進

この二十坪の荒れた農地を菜の花畑に変えたことが、資源循環型社会の切り札として市民と行政が連携して進めている「菜の花エコプロジェクト」推進の始まりである。

そして、平成十五年度に「たはらエコ・ガーデンシティ構想」が国の

環境共生まちづくりのモデルとして選定され、これを契機として市が「菜の花エコプロジェクト」を始め、七つの主要プロジェクトを推進することによって大きく前進した。

平成十八年四月には「NPO法人田原菜の花エコネットワーク」を設立した。設立まで何回も説明会を開き、趣旨への賛同者を募集した。初年度は会員数三十人、賛助会員一業者で発足した。現在では会員数五十人、賛助会員十三業者が増え、積極的に菜の花栽培の拡大を図っている。

各地域で個人・グループが中心となる菜の花エコプロジェクトの取り組みを支援し、保育園・小学校等での菜の花種まき体験や収穫体験などを行うことで、ネットワークはさらに広がり、日本風景街道事業にも発展的な広がりを見せている。

現在、市内には菜の花畑が百力所に点在し、総面積は約二十五・八ヘクタールに及んでいる。このうちNPO法人と個人で管理している観賞用菜の花は五十六カ所・九・二ヘクタール（盛花期十二・三月）、搾油用菜の花は二十一カ所・約二・六ヘクタール（盛花期三・四月）である。平成十八年度



NPO法人田原菜の花エコネットワーク



園児による種まき



田原産100%菜種油「たはら」

から二十三年度までに四十カ所（約六・五ヘクタール）の農地が露地栽培を希望する担い手へ橋渡しされ、遊休農地が着実に解消されている。

### 菜種油を生産販売、回収も

今後、NPO法人田原菜の花エコネットワークは、さらに多くの遊休農地に菜の花を植え、美しい農村景観を作り出すことで、地域に住む人、訪れる人の心を和ませていきたい。

また、菜種油の生産販売からその回収・廃食用油リサイクルまでの一連の取り組みを進めることで、地産地消のみならず、資源循環型社会を目指し、世代を越えて引き継ぐ地域づくりに貢献していきたい。

## 被災地NGO協働センター

# 避難所で「足湯」、まけないぞう事業も —阪神大震災の経験活かし支援活動—



代表 ● 村井雅清

### 大震災発生直後に被災地入り

二〇一一年三月十一日、未曾有の大災害が発生し、当NGOはその日に神戸を出発し、翌日の午前中に被災地に入った。

私たちは一九九五年の阪神淡路大震災がきっかけに発足したNGOで、主な活動は災害救援・生きがい仕事づくり・まけないぞう・寺子屋事業・ネットワーク事業などである。

今回、被災地外からの支援としてかなり早い段階で被災地に入ったことで周囲を驚かせたが、私たちとしては至極当然の選択であった。

こうしたすばやい対応ができた背景には、阪神淡路大震災以来十七年間で築いてきた国内のネットワークが活かされたからと言える。

特に災害救援を目的としたNPOや社会福祉協議会などを対象にし、六年前から静岡で行っている「東海地震などを想定した広域図上訓練」で築き上げたネットワークの力が大きい。

### 被災地から被災地へのリレー

さて、被災地での主な活動は「足湯ボランティア」と「まけないぞう事業」である。どちらも阪神淡路大震災で生まれた活動だ。

阪神淡路大震災では、全国から駆けつけた百万人を超える初心者ボランティアに教えられることが、一人ひとりの被災者を尊重しようということであった。

そこから導き出されたメッセージが「最後の一人まで救

う」であった。このことは東日本の被災地でも語られている。あの時の教訓から、私たちは災害直後から被災者に寄り添い続け、被災者支援を行ってきた。

そして、今回の救援活動を始めるにあたって「被災地から被災地へのリレー」というコンセプトを大切にしてきた。先の足湯ボランティアやまけないぞうのように、阪神淡路大震災の被災地から東日本の被災地へ、また「三・一一」前にあった宮崎県新燃岳の噴火災害により降灰被害に遭った農家の野菜を買い取り、東日本の炊き出し用の具材として提供するという、被災地リレーを続けてきた。

### 丁寧な見守りを！

災害から十カ月が過ぎ、これからのボランティア活動に求められるのは一人ひとりの被災者に対する丁寧

な見守り活動である。  
いま流行の「傾聴ボランティア」という手法で、仮設住宅の被災者を訪問することも必要だろう。

そこで、当NGOはこれまで成果を収めてきた足湯活動を通して寄り添い、また、まけないぞうづくりを通して寄り添い続けたい。こうして被災者と直接接する中で、被災者のメッセージを受け止め課題解決につなげたいと考えている。

\*まけないぞう：被災地支援として、全国から新品のタオルを頂戴し、そのタオルで「象さん」の顔をつくり壁掛けタオルに仕上げる手芸品。一つ四百円で販売し、作り手である被災者に百円を差し上げ、残りの三百円から材料費や輸送費を引いた中から五十円を「まけないぞう基金」としてプールする。



“まけないぞう”作成風景



“まけないぞう”完成！



“足湯ボランティア”の様子

## NPO法人豊かな食の島 岩城農村塾

愛媛県上島町

移住者らが農地再生に貢献  
―特産品の開発とブランド化を推進―

塾長 ● 脇 義富

## 三千本桜で知られる離島

愛媛県上島町の岩城島は、瀬戸内海のほぼ中央部に浮かぶ離島である。島の周囲は十二キロ、人口は二千数百人である。三千本桜のある島としても有名である。

島の農業は、降雨が少なく、花崗岩の痩せた土壌のため、古くは麦や芋の栽培が盛んであったが、昭和の半ば頃からは柑橘類の栽培が奨励さ

れ、温州みかん、八朔、夏みかんなどの栽培が主となった。

昭和四十年代になると、温州みかんが全国的に過剰生産となり、現在まで価格低迷が続き、農家の生産意欲が薄れて廃園が増加し、後継者は無く、高齢化が進行しているのが実情である。上島町の耕作放棄地は愛媛県内でも特に高い状況にあり、岩城島の農業も危機的な状況にある。この状況が続くと、山の裾野の美



新品種の宣伝を行い、販路拡大に務めている



荒廃地を再生させる活動



豊かな食の島 岩城農村塾のメンバー

しく耕された果樹園や果実の実る島の景観は竹林に変わり、安全で新鮮な食料が島内で確保できなくなり、豊かな食の島として後生に残すことが不可能となろう。

## 青いレモンの知名度向上を図る

このため、豊かな食の島の農業を守ろうと立ち上がったのが、島で先進的な農業を実践しているI、Uターンを中心とした十一人の農家である。平成二十二年にNPO法人「豊かな食の島 岩城農村塾」を結成した。

会員は、自らが自立できる農業を実践するために特産品の開発とブランド化の推進に努めた。さらに経営の安定化を図るために委託販売だけでなく、自らが価格設定する販売方法や流通の改善を実践している。

ブランド化は、島の気候に適した新品種を他産地に先駆けて導入し、特産品に仕上げる。瀬戸内気候の温暖で冬の極低温が高いことを利用し、レモンのハウスと露地栽培を組み合わせた周年販売や国産レモンの代名詞となっている青いレモンの知名度向上を図っている。

また、島の風土に適した品種としてライム、せとか、はれひめ、たまみ、姫レモン、紅まどんな、弓削瓢箪等の栽培を試みる。熟期の異なる

品種の導入は豊かな食の島をアピールする商材でもある。

島の農産物の宣伝活動は、都市でのアンテナショップや物産販売イベントに積極的に参加し、顧客の開拓、確保を行っている。

農業の活性化には、後継者の確保が不可欠であり、新しい人材の募集を行っている。都市部の大学や農業者大学校に赴き、島の農業を紹介して農業の魅力を伝えている。

また、新農業人フェアに参加して島の農業に興味を感じる担い手を募る。さらに町の定住促進制度にかかわり、ワーキングホリデー、お試し定住者の農業研修体験も受け入れている。

## 荒廃地の解消

新規就農者が農業を始めるには農地が必要となる。このため、農村塾が行政機関と連携し農地の貸借支援や荒廃地の開墾を援助する。新規就農者は開墾の未経験者であり、会員がパワーショベル等で農地を整備し、就農者の耕作地を確保する。

農業に定着してもらうには栽培技術の支援も欠かせない。作物に応じた栽植方法、品種選択、管理技術、農業機械の導入と整備などの手助けと助言を行っている。

## 株式会社赤岡青果市場

農家の所得向上、雇用の創出に貢献  
—中山間地域のモデル事業を構築—

代表取締役 ● 村山寿夫

「農家を豊かに」が  
会社の理念

高知県の施設野菜産地の中に位置する(株)赤岡青果市場は、東西それぞれ五十キロメートルに広がる範囲で、生産されるナス・ニラを基幹として数多くの品目を取り扱っている。当社では「農家を豊かにしてあげたい」という創業者の思いを、今も会社の理念として貫いている。

産地の農産物を消費地に届ける役割を担う市場として、地域農業や農家の方々の発展なくして市場の成長はあり得ないとの信念のもと、「産地と共に歩む」ことに軸足を置いて種々の取り組みを進めてきた。

また「出荷農家の品物をお預かりし、売買参加者の方々にセリを通じて買っていただく」ことが市場の業務であるが、それが単に経済行為と

してのつながりに留まることなく、日常的に人と人とのコミュニケーションを大切にしていこうと心掛けて業務を行ってきた。このような取り組みを通じた、農家の信頼に應える市場態勢や生産者の労力軽減化への支援、安心・安全の商品提供をモットーとしている。

## 農家の労力軽減にも努力

当市場では、出荷をしていただく

農家の立場に立ったサービス提供を基本に取り組んでおり、特に他からの手が届いていない、高齢者・女性を基幹労働力とする農家や小規模農家にも意を尽くし、理解もされてきている。

①社員による早朝集荷システム  
高齢化の進む中、「栽培はできても出荷できない」「距離が

遠く出荷に時間を要する」といった課題を、社員による集荷によって農家の負担軽減を図り、農作業に集中できる環境を創り出してきた。併せて、出荷資材の配達を行い、極力農家の負担を減らす方法をとると共に、その機会を捉えて農家とのコミュニケーションを深めている。

## ②パッケージ加工の実施

農家のパッケージ作業に全てを依存するのではなく、鮮度保持能力の高い包装を行うニラを始め、ミョウガ・ピーマンもバラ荷で持ち込まれた生産物のパッケージを受け持つなど、農家の労力軽減に努めている。これを担う当社の加工場は、地元の人を主体とする約五十人のパート労働者の雇用のもととなっている。

## ③営農指導員による技術指導

農家とのつながりは、営農指導員の配置により一層深まっている。農薬の適正使用、生産管理のノウハウ、

環境保全型農業など新技術の導入等の指導は、高品質化と安心・安全の向上につながっている。

## ④迅速な精算と奨励金制度

出荷農家への支払いがセリの翌朝から実施できるよう、精算は迅速かつ正確を期して行っている。また、出荷農家及び売買参加者への奨励金制度を設け、出荷農家・売買参加者・市場の三者の共存共栄と市場の活性化につなげている。

今後も、これまでに確立してきたシステムを維持しつつ、会社の理念を踏まえて集荷態勢やパッケージ、営農指導などサービス全般の一層の充実を図っていききたい。

また、地域やそこで営農活動を行っている農家の課題を的確にとらえ、市場として担うことのできることにについて、その時々に応じた支援の方策を見出ししていきたい。



集荷産品積み下ろし



パッケージ風景



セリの模様 (ユズ)

## 到津の森公園 市民ボランティア「森の仲間たち」

# 市民の手による公園づくり — 到津遊園の閉園危機に立ち向かう —



会長 ● 村井ふさよ

北九州市の市街地に残る照葉樹の

森に守られた位置に「到津の森公園」はある。かつては民営「到津遊園」として、六十八年間にわたり住民に親しまれてきた。

しかし、当時の経営者より経営悪化から閉園が発表されると、これを機に市民の存続運動が高まり、約二十六万人に及ぶ存続の署名を集めて、市民が支える動物のいる自然の森公園「到津の森公園」（以下、「園」という）として、北九州市に引き継がれた。

### 再オープンと共に始動

北九州市は、平成十二年五月にボランティア募集を開始し、約二年間、動植物に関することや植栽方法、動物の飼育状況把握などの学習等、ボランティアが園内で活動するための

準備を行った。

その後、ボランティアは平成十四年三月に自主組織を立ち上げ、同年四月の園再オープンと共に市民ボランティア「森の仲間たち」として活動を始めた。

私たちの活動は今年、十周年を迎え、会員数は常に百二十人程度を維持し、次のような七つのグループに分かれて活動している。

- ① 飼育グループ＝獣舎の清掃やエサ切り
- ② 植物グループ＝園内の植栽や清掃
- ③ 動物ガイドグループ＝動物についての案内
- ④ 里山ガイドグループ＝園内の森の観察会開催や野草の紹介
- ⑤ 環境教育グループ＝絵本読み聞かせやネイチャーゲーム等イベントの開催

- ⑥ イベントグループ＝動物のエサの残り枝等を使って工作教室の企画・開催
- ⑦ 広報グループ＝広報活動、ボランティア通信「森のお便り」の発行

### 自立した市民のボランティア

「森の仲間たち」の運営はボランティアが独自に行っており、会員の年会費で運営し、行政から財政的援助は一切受けていない。また、活動内容は園からの依頼も含めて、すべてボランティアたちの意思で決定している。

さまざまな人生経験を持つ人びとが集い、性別や年齢、職歴などにとらわれず、自由な雰囲気大切にしているのも特徴である。

このような、自由で自立的な活動理念のもとに、園で行う「林間学園」「学習プログラム」などに協力し、豊かな自然をはじめとした公園の魅力

力を発信し、園のイメージアップやイベントを通じてリピーター層を形成することを強く意識している。またマスメディアの取材にも積極的に応じている。

### 「森の仲間たち」のこれから

活動開始から十年。会員の年齢構成は確実に高くなってきており、体力のいる作業は難しくなっている。

これからの活動は創意工夫により活動方法や内容を変化させ、気軽に自然と親しめる「市民と自然を結ぶ窓口」として整備されている「到津の森公園」そして「世界の環境首都」を掲げる北九州市の発展に少しでも役立つことを目指したい。

そのために、市や地元の大学、青少年ボランティア機関などとも連携し、若年層のボランティアへの関心を高められるよう、新たな一歩を踏み出そうとしているところである。



環境教育グループ「工作教室」



植物グループ「清掃活動」



里山ガイドグループ「森の観察会」

## 財光寺農業小学校

シニア世代が子ども達に農業指導  
―地域農業を元気にし「食育」を展開―

校長 ● 二見順雄

宮崎県日向市にある財光寺地区は、都市地域と農村地域が混在する地域であり、農業従事者の高齢化や遊休農地の増加という課題を抱えている。この地区では、食や農に関心が薄く「野菜はスーパーで買うものだ」と思っている子どもたちが多かった。

そこで、農業体験を通じて学ぶ食育を展開したい、という思いを持つシニア世代のメンバーが集まり、九州初の「財光寺農業小学校」を開校した。二〇〇九年四月のことだった。

## 「食と農とのち」を学ぶ

子どもたちが、自分で土を耕し、汗を流し、自己管理しながら季節に応じた野菜を作ることが取り組みの基本である。収穫した野菜の第一号（初穂）は、ご先祖様（神仏）に供

えることや、苦手な野菜を育てることを入校条件としており、農業を通して「食と農とのち」を学ぶことが大きなテーマとなっている。

毎年、小学校のバザーなどで子どもたちが売り子となり野菜を販売するなど、子どもたちが野菜を「作る」「喜び」だけでなく、「配る」「喜び」や「売る」「喜び」も味わえるような取り組みを企画し、スタッフが知恵を出し合いながら活動している。

また、今年度は収穫した野菜（玉ネギ約千個）を東日本大震災で被災された地域に届ける活動も行った。この取り組みを通じて、子どもたちが農業の大切さに気付くだけでなく、様々な成果が上がっている。



「農業小学校」の入学式



登校日は原則、第一・第三土曜日の午前中



タマネギ収穫（臨時登校）

第一に、農業を通してシニア世代と子どもたちとの距離が縮まり、世代を超えて地域が一体となった共汗（共感）活動が生まれ、家族や地域の絆が深まっていることである。

実際、農業体験をしたことのない保護者も多く、親子・家族と一緒に学び作業することで、会話の増えた家族も多い。

第二に、労働の喜び、作物を作る大変さ、協力し合うことで生まれる友情など、学校では学べないことを体験していることである。

また、作った野菜を配ったりすることで人に喜ばれることの嬉しさを知り、優しい気持ちで育ち、心の教育にもつながっている。

第三に、農園の入口に設置してある「参観記帳ノート」に寄せられた激励や応援の声が子どもたちを育てていることである。

散歩途中の人や活動を知った人たちのメッセー지는毎年千件を超える。おかげで子どもたちは「自分たちがしていることは価値がある」ことを実感し、自信や生きる力につながっている。

## 農業小学校のこれから

この農業小学校は、子どもたちにとっては、「人としての成長の場」であり、一緒に活動している大人にとっては、「生きがいの場」である。ここでの経験が、子どもたちの成長に少しでも役立ってくれることを期待している。

また、現在参加している若い保護者が、子どもの喜ぶ姿を目にしながら要領を覚え、シニア世代から学んだことを次の世代に教えていく流れが構築され、自然な形で継続されることを期待している。

## 宮古織物事業協同組合

# 「宮古上布」を地域活性化の架け橋に —地域の伝統文化を継承する取り組み—



代表理事 ● 長濱政治

### 宮古上布の歴史

宮古上布は沖縄の宮古島で、苧麻（ちよま）という多年草の植物から繊維を取り、髪の毛よりも細く紡いだ糸に藍で柄を染め平織りした布で、強靱で弾力性を持ち、その通気性と軽さは蟬の羽にたとえられ、盛夏の着物地では最高級と評価される。

宮古上布は一五八三年、稲石（いないし）という女性が琉球王に「綾錆布（あやさびふ）」を献上し、始まったとされる。それを百年遡る一四七七年、朝鮮の李朝実録による宮古島記述には「その俗、苧布を用い藍を染め織って衣とし、その色は綵段（さいだん）のようである」とあり、この記述と島の古い歌から、宮古上布の起源は六百年以上前と推定される。

一六〇九年、薩摩藩による琉球王

朝支配時、宮古上布は薩摩上布として江戸や京で流通した。「宮古上布」と称されたのは一九〇三（明治三十六）年に二百五十年間、島民を苦しめた人頭税が廃止されてからのことである。

昭和五十年に伝統工芸品指定、昭和五十三年国の重要無形文化財に認定、平成十五年糸積みの技術が国選定保存技術に認定された。

### 宮古上布の盛衰と継承

大正〜昭和十二年頃は宮古上布の隆盛期で、年間生産量は一万反を超え、宮古島の経済を支える産業に発展した。しかし、日中戦争〜第二次世界大戦中の昭和十七年には、上布の生産販売が禁止され、上布の生産は一時途絶える。



ワークショップ



公民館祭り



文化祭

終戦直後の昭和二十一年、宮古上布生産は息を吹き返したが、原料の苧麻（ちよま）が不足し需要に応えられず、さらに時代は洋服化が進み宮古上布の生産反数は激減、上布生産はまたもや窮地に立たされた。

その後、上布の技術継承のために組合は組織され活動してきた。

昭和四十二年の法人化以後、後継者育成事業、子供たちの生産工程見学と体験の受け入れ、県推進のグッジョブ運動に参画。地元高校生の就業体験、全国展開では首都圏や各地の伝統的工芸品展、着物展示会への出展、島特産品と織物をコラボした物産展開催等に積極的に参画した。

一方、地元では行政と共に文化祭、産業祭、トライアスロン大会、織物組合独自の展示会やワークショップを開催した。さらに、本物を気軽に持つコンセプトで上布ハギレを利用した手作り一点物などを開発し、伝

統的工芸品・重要無形文化財「宮古上布」を紹介・継承してきた。

### これからの宮古上布と織物組合

かつて宮古上布生産のピーク時には、島の子供からお年寄りまで、その担い手として伝統的織物に関わっていた。しかし、宮古上布の工程は複雑多種でまた藍染めの十字緋を織り上げる技術は一朝一夕には取得できず、平成二十三年現在、年間生産反数は二十反未満となっている。

宮古圏域の産業経済に貢献してきた宮古上布に携わる裾野を広げ、その振興を図ることで地域の活性化につなげる事が必要である。

組合では現在、あらゆる種類の苧麻糸を活用し現代に受け入れられる製品を開発している。これまで地域に育まれてきた宮古上布の今後のあり方を探りながら、新たな展開を積極的に推進して行きたい。

## 岩手県一関市

# 「お互いさまの関係」胸に —沿岸被災地の後方支援に取り組む—



市長 ● 勝部 修

## 市内復旧と後方支援を併行

平成二十年六月に当市を震源として発生した「岩手・宮城内陸地震」の復旧工事が終わり、復興に向けて「元気な一関」を発信しようとしていた矢先の昨年三月十一日、東北地方を襲った「東日本大震災」。

沿岸部の津波被害と原発事故の陰であり目立たないものの、内陸部の当市も最大震度六弱を記録した。四月七日の最大余震（震度六弱）と相まって、家屋、宅地被害や農用地など広範囲に甚大な被害を受け、被害額は岩手・宮城内陸地震の約六倍にも達した。

東京都豊島区をはじめとする自治体職員の派遣応援や、支援物資の提供など、全国から温かい励ましをいただき、現在、復旧が順調に進められている。

一方で、沿岸部の津波被災地である陸前高田市、気仙沼市は、当市と隣接し、昔から人的にも物的にも交流の活発な地域でもあり、震災直後から市民が被災地に駆け付け、さまざまな支援活動を行ってきた。

当市は、市内の復旧活動とともに、これら沿岸被災地に対して、職員の派遣をはじめ、避難所巡回バスの運行、避難者の受け入れ、公用車の提供、両市の広報紙を当市ホームページで掲載、避難所での巡回健康診断チームの派遣など、現地駐在職員（現地の災害対策本部会議にオブザー



沿岸への支援物資搬送



公用車の提供



市内体育館を支援物資保管場所に提供

バーとして出席）からの情報を基に、迅速な支援体制を組んだ。

また平泉町、藤沢町（昨年九月に当市と合併）の両町とともに「東北地方太平洋沖地震被災対策一関市・平泉町・藤沢町合同支援本部」を組織し、合同で支援に当たった。

## 「身内が被災したと思って」

特に、陸前高田市への職員派遣は、同市内の宿泊施設が被災したため、「自宅から通勤できる」当市の地理的状况を生かし、また職種、職階などについて陸前高田市のニーズを確認しながら職員を選抜し、現在十一名を派遣している。

私は、全職員に対して「身内が被災したと思って、いま何をやるべきかを考えよう」と言い続けてきた。職員もこれにしっかりと応えてくれている。

当市では県境を越えて気仙沼市の仮設住宅用地を提供し、現在二百世帯を超える方々が

生活しているが、この仮設住宅で当市の光ファイバーを通して宮城県のローカルテレビ放送を観られるよう整備した。

これも職員の身内を想う気持ちから出た企画だと思う。

津波被災地の復興のためには、①「市民（住民）同士のお互いさまの関係」、②「行政同士のお互いさまの関係」をしっかりと構築するとともに、さらに③「企業同士のお互いさまの関係」が不可欠だと思っている。

両市の企業がいま、一関市内の企業の工場で再出発のスタートを切っている。そのための支援も惜しまない。「隣町」でしっかりと再出発の歩を進め、一日も早く故郷の地に大きな看板を掲げる日が来ることを願っている。

今後とも「近助」の精神で支援してまいりたい。

岩手県住田町

岩手県住田町

# 木造二戸建て仮設住宅を建設

## ―まちの木材を使い、独自の被災地支援―



町長 ● 多田 欣一

### 震災直後から後方支援を展開

平成二十三年三月十一日、十四時四十六分に太平洋洋沖で起きた巨大地震による大津波で、東北沿岸部は壊滅的な打撃を受けた。

沿岸部から二十キロほど内陸に位置する本町では、幸い津波による被害はなく、地震発生直後から、被害の甚大だった隣接する大船渡、陸前高田両市へ水や食料、物資を送るなどの後方支援を開始した。

### 林業のまちならではの支援

これら後方支援の取り組みの一つに、今回の受賞でも評価いただいた、町単独での木造応急仮設住宅の建設が含まれており、被災地全体でも着工がわずかだった三月下旬に建設が始まり、五月下旬には三団地、全九

十三戸を避難所で生活されている方々に提供することができた。

この木造応急仮設住宅は、町産のスギやカラマツを使用した約九坪の一戸建てで、外壁から内装までを木造とするなど、従来のプレハブ型応急仮設住宅とは一線を画したものとなっている。

この木造応急仮設住宅については、これまで、報道関係などから様々なお問い合わせをいただいております、そのなかで、早期建設に至った理由を問われることが多い。

その際には、大船渡市、陸前高田市、住田町がこれ



木造応急仮設住宅の外観



木造応急仮設住宅の内部



六本木ヒルズでの展示の様子

まで気仙地域という枠組みで歴史や文化、生活を共有してきたなかで、「被災された同郷の方々の痛い思いに接し、一刻でも早くプライバシーが守られ、安らげる環境を提供したいと思うのは至極当然のこと」と、お話しさせていただいている。

### 首都圏でも大きな関心を集める

木造応急仮設住宅の取り組みには、全国各地から多くの支援や応援の声を頂戴している。そのなかの一つに、音楽家の坂本龍一氏が代表を務める森林保全団体「モア・トゥリーズ」も含まれている。

七月下旬には、東京の六本木ヒルズを会場として、木造応急仮設住宅の展示を主とするイベントを企画いただき、およそ七万人が来場するなど、首都圏でも「住田型」の木造応

急仮設住宅は、大きな関心を集めたところである。

現在は、役場内に東日本大震災支援室を設置し、団地内におけるコミュニティ支援や、保健師による健康相談会などを実施している。

また、町民においても、ボランティア団体などと協力し、入居者の生活支援や、団地内の自治会設立の手助けをするなど、官民が一体となった取り組みを展開しているところである。

まちの重要産業である林業を活かした独自の支援活動については、全国各地から多くの支援などをいただき、大変勇気づけられている。

本町としては、被災地にエールを送る立場にあるが、当事者としての認識を持ち、今後も沿岸地域の復興に可能な限り協力をしてまいりたいと考えている。

## 宮城県大崎市

沿岸部の被災者支援に全力  
—温泉地を活かして心身のケア—

市長 ● 伊藤康志

大崎市は、平成十八年三月三十一日に一市六町（古川市・松山町・三本木町・鹿島台町・岩出山町・鳴子町・田尻町）が合併して誕生した。宮城県の北西部に位置し、山形・秋田両県に接し、「ササニシキ」「ひとめぼれ」等の美味しいお米の誕生の地であるとともに、温泉番付で、東の横綱として認定された奥州三名湯「鳴子温泉郷」を有する、多くの宝に恵まれた地である。

その恵まれた宝を活かし、本市はもとより宮城県、東北をこれからさらに元気にしていくという矢先の昨年三月十一日、東日本大震災が発生し、本市においても甚大な被害を受けた。

震災後、旅館組合とともに  
迅速対応

それと同時に、沿岸部自治体の津

波による悲惨な状況を知り、本市でできる支援として、東北を代表する温泉地を抱える本市の特性を活かして、沿岸部自治体で被災された皆様を鳴子温泉地域の宿泊施設で受け入れることを、震災から一週間後に旅館組合の皆様と協議を行って決定し、その後、すぐに沿岸部自治体を慰問し、二次避難所としての受け入れを表明させていただいた。

本市では二次避難者の皆様が一刻も早く心身ともに健康を回復し、元気になって私たちの東北地域の復興に取り組んでいただきたいという願いで「災害対策本部」とは別に「沿岸地域等避難者受入本部」を設置し、三月三十日から十一月九日までの間、ピーク時には千百人、延べ九万人以上の皆

様を受け入れ、保健師や生活相談員の巡回、支援物資の配達などを行うとともに、多くの市民や各種団体と協力し合い、心を一つにして避難者皆様の支援活動を行った。

また、市民の皆様の自発的な支援活動として、「梅の花見」「菜の花フェスティバル」「フリーマーケット」「運動会」などを開催し、「絆」という地球に生きるすべての者にとって最高の心の栄養補給を避難者の皆様はもとより、市民をはじめとする我々も得ることができた。

## 何より嬉しかった被災者の笑顔

そして、市民の皆様と一体となり受け入れをさせていただいた私どもにとって、何より嬉しかったのは、避難者の皆様が心身ともに疲れ果てて鳴子温泉地域に到着した時の姿とは見違えるような元気な姿となり、故郷の仮設住宅などにお戻りになる

時、「ありがとね」という笑顔を拝見することができた時だった。しかし、被災された皆様の心の傷が全て癒えたわけではない。今後も本市として様々な形での交流を通して沿岸部自治体への支援を可能な限り継続的に実施してまいりたい。

結びに、私たちはこのたびの災害で多くの大切なものを失ったが、多くの教訓や真に大切なものに気づかされた。地域の特性を活かした社会インフラづくり、持続可能な食と水・エネルギーの選択、家族やコミュニティの再興、絆や連携がいかに大切であるかなどを改めて実感したところである。

これから先は、このたび得たものを糧に前を向き、元気な宮城・元気な東北を、今生きる者として再興させ、次の世代に「絆」というたすきを渡していきたいという思いを強くしている。



佐藤南三陸町長と再会を喜び合う南三陸町民



伊藤大崎市長と近況などを話し合う佐藤南三陸町長



ステージ前で大崎市民と沿岸部避難者との交流風景

## 宮城県川崎町

宮城県川崎町

# 「支え合いの大切さ」再認識

## ―被災者への支援を通じ町民が一丸に―



町長 ● 小山修作

川崎町は、町土の約八〇％を森林が占める農林業を基幹産業とした町である。昔から農作業の繁忙期には地域住民が共同作業を行うなど、地域の結束が強い町だったが、核家族化の進行や情報機器の普及等で、結束が徐々に希薄化してきた。

こうした状況の中、昨年三月十一日に発生した東日本大震災は、本県を含む東北三県に経験したことのない甚大な被害をもたらした。特に沿岸部の自治体では、大規模な地震と想定をはるかに超えた大津波の被害を受け、多くの住民は先行きが見えない避難所生活を余儀なくされた。

### いち早く石巻市民の二次避難所に

幸い当町においては、県の内陸に位置していることもあって、人的被害を含め沿岸部自治体と比較すると

被害は少ない状況であった。

震災からの復旧に向け少しずつではあるが、歩み始めていた矢先、沿岸部自治体住民の避難所生活の過酷さや、それを支える自治体職員の膨大な負担を目にした時、「我々に来ることは何か」と「支え合い」の気持が住民から湧き上がり、特に、被害が甚大な石巻市民の二次避難所として町内の宿泊施設への受け入れをいち早く表明した。

二次避難者を可能な限り支援するため、関係する社会福祉協議会や宿泊施設で組織している自治会、商工会など既存の団体へ呼び掛けを行い、支援活動を開始。加えてボランティア団体やNPO法人、建設職組合など多くの町民から参画の輪が自然に広がった。

支援の内容は「石巻市民と川崎町

民ふれあい交流会」「野草園の草取り体験・公園の散策」「青根震災復興夏祭り」「手打そば体験会」「お茶っこ飲み会」――などである。

### 支援活動の成果

▽住民の地域間交流の大切さ高揚  
二次避難者受け入れにより地域間交流の重要性を再認識し、自主的な地域活動や町などと連携しながら交流活動を展開している。

▽ボランティア団体等と連携拡大  
二次避難者受け入れにより住民は志を高め、既団体を中心に避難者の支援活動を企画・立案したことにより、団体内の活動が活発化し、町を含め相互の連携が図られ定期的に展示会など活動の場を広げている。

▽川崎町と石巻市の交流へ展開  
宿泊施設においては、石巻市に戻った二次避難者に対し、「再び川崎へ」という思いで交流会や宿泊サービスの無料提供するなど、自主的な活動を継続している。

▽避難者の受け入れ状況  
二次避難者については、受入



石巻市民と川崎町民のふれあい交流会



「お茶っこ飲み会」レクリエーションを通じ交流事業

期間四月二十日から九月三十日の百六十四日間で、実人数二百十一人、延べ利用人数一万七千七百一人、一、五次避難者※は、受入期間六月二十日から八月三十一日の七十三日間で実人数八十六人、延べ利用人数三百十二人と多くの受け入れを行った。町では震災以前から「町民との協働のまちづくり」を提唱し、様々な取り組みを行っていたが、今回の二次避難者受け入れを機に、町内の団体や住民が連携し、さらには地元住民による自主的な活動により地域資源の活用が図られるなど、地域おこしのきっかけとなった。

これからも「支え合いの大切さ」を忘れず地域づくりを展開していきたい。

※一・五次避難者とは、避難所生活等を余儀なくされている方を対象に、気分転換等のため一時的に二次避難所へ宿泊すること。

## 東京都江戸川区

# 地域「コミュニティ」を築く「リズム運動」

## ―江戸川区の熟年者が元氣な理由(わけ)―



区長 ● 多田正見

江戸川区は若くて活気がある。区民の平均年齢は四十一・九六歳(平成二十三年一月)で、東京二十三区の中で最も若いまちである。高齢化率も一八・四二%(平成二十三年一月)であり、二十三区で三番目に低い。しかし、今後、地域の高齢化は着実に進んでいく。

### 地域づくりを支える熟年者

江戸川区では「高齢者」を「熟年者」と呼んでいる。これは、円熟した人格と熟慮できる知恵、熟達した技量をもった人という意味で、昭和五十八年から使用している。

このような考え方にに基づき、本区は熟年者を地域の中で積極的な役割を担う存在と位置づけ、多くの施策を展開してきた。そのひとつが「リズム運動」である。

江戸川区の「リズム運動」は昭和五十五年に誕生した。昨今、高齢者の健康運動が全国で盛んに実施されているが、本区の「リズム運動」は、その先駆けとして三十年以上も前から熟年者に親しまれている。

「リズム運動」は、熟年者の健康保持及び仲間づくりを促進するため、社交ダンス(マンボ、ルンバ、ブルース、ジルバ等)のステップを熟年者用にアレンジした、本区独自の軽運動である。

平成二十三年四月一日時点で、区内二百二会場で二百三十八団体、一万二百五十人(女性八千七百五十七人/男性千四百九十三人)の熟年者が「リズム運動」を楽しんでいる。区内における「リズム運動」の実施回数は、年間で延べ八千回を超えている。

また、毎年六月には約五千人が参加するリズム運動大会、毎年十一月には約三千五百人が参加する地区交流会を開催している。数千人の熟年者が一堂に会し、「リズム運動」を楽しむ姿は圧巻だ。このような大会や交流会

は、日頃の成果を披露し合う場であるとともに、地域の枠を超えた仲間づくりの機会にもなっている。

このように、江戸川区は三十年以上も前から「介護予防」の視点を施策に取り入れてきた。そのため、本区の要介護認定率は、一三・三六%(平成二十三年四月)であり、二十三区で最も低い数字である。つまり、本区には健康で元氣な熟年者が多いということだ。

### 地域とともに歩む「リズム運動」

「リズム運動」は、現在六十六人いるリズム運動指導員(有償ボランティア)の協力の下、「くすのきクラブ(区内六十歳以上の熟年者団体)」と区の協働で実施されている。「くすのきクラブ」の主な役割は、会場の確保及び当日の運営から片付けまですべてである。



第30回リズム運動大会



リズム運動を指導する様子



男性も楽しめるリズム運動

「リズム運動」の参加者の多くは、この「くすのきクラブ」の活動をおして地域で様々なボランティア活動にも励んでくれている。区は、指導員の育成・派遣、リズム運動大会や初心者教室等の開催など「リズム運動」を側面から支援している。

健康であることは社会貢献のひとつである。今回の「地域づくり総務大臣表彰」の受賞を契機に、これからも江戸川区の熟年者の皆さんには、「リズム運動」を通して健康で元氣になり、高齢社会における地域づくりの担い手として大いに活躍してもらいたい。

## 静岡県富士宮市

静岡県富士宮市

路線バス衰退受け新たな公共交通  
―地域が支える「バス停オーナー制度」も導入―

市長 ● 須藤秀忠

富士宮市は、富士山の西南麓に位置し、全国の浅間神社の総本宮である「富士山本宮浅間大社」の門前町として栄えたまちであり、近年ではB級グルメの「富士宮やきそば」が全国に知られている。

本市の面積は県内第四位という広大な市域を有し、観光資源も多く、酪農やニジマスの養殖が盛んである。しかし、市域が広いため農山村部にも多くの市民が居住し、住民の生活交通の確保は、今後の市の発展においても重要な課題である。

## みんなで支える公共交通

モータリゼーションの進展に伴い人々は快適な生活を手に入れたが、半面、以前は鈴なりの利用者があった路線バスが減便や路線廃止に追い込まれているのは、全国の地方自治

体が抱える問題のひとつであろう。

当然、本市でも例外ではなく、ご紹介する「宮バス」「宮タク」の導入が検討された平成十九年当時を振り返ると、郊外地域では民間路線バスの深刻な赤字による廃止・減便が続く、公共交通の空白化が進むとともに、中心市街地においても人口の減少や空き店舗の増加など空洞化が進行する状況に陥り、市域全体における高齢者や障害者の生活交通の確保と中心市街地の活性化を図ることが急務であった。

これらの問題の解決に向け、本市はバス事業者やタクシー事業者と協議して「行政・住民・交通事業者」が、応分の負担を行うことで持続可能な公共交通を実現する仕組みを開発した。その解決策が、市街地循環バス「宮バス」とデマンド型乗合タクシー

「宮タク」である。

宮バスは中心市街地の公共施設、集客施設、医療施設を循環するコミュニティバスで、中心市街地の回遊性を確保する一方、バス路線の沿線事業所や医療施設からバス運行への協力を求めるバス停オーナー制度（ネーミングライツの販売）により、安定的収益の確保に成功した。

運行開始年度である平成二十年度の実績を見ると、一日に二十五人程度の利用者は四倍の百人まで増加し、運行にかかる経費は四百三十八万円のバス停オーナー協力金と静岡県県の補助金で市の財政負担はゼロ円になる、という快挙を成し遂げた。

一方、郊外部から中心市街地へ戸口から戸口へ移動可能な宮タクは、その料金の低廉さと利便性の高さが受け入れられ、こちらにおいてもバス利用者が一日当たり十八人であったのに対し、宮タク利用者は二十四人となり、地域の足として歓迎された。

また、経費面でも民間バス路線への補助金三百万円は、路線廃止後の代替交通である宮タクにおいて財政負担を二百万円（含む県補助金）



MM(モビリティマネジメント)乗り方教室



富士山と宮バス

に圧縮され、大きな改善が得られた。これは利用者数に見合わないバスの運行に見切りをつけ、タクシーを予約制の乗合車両へと変身させて飛び地でのエリア運行を行うという、全国でも例のない事業に関係者が積極的に取り組むことで得た成果だった。

持続可能な公共交通を  
目指して

「宮バス」「宮タク」は運行開始以降、多くの住民や地元企業に受け入れられ、利用者の増加や運行地域の拡大など順調に発展している。

しかし、成功に甘んじることなく、未来もその時代にあった公共交通を再編、構築していくことが重要だと考え、本市では現在、事業評価サイクルの確立などによる新たな利用者創出に取り組んでいる。これらは本市の目標である「持続可能な公共交通」を実現し、住民の生活を守るセーフティネットとなっていくであろう。

## 新井偉夫氏

# 川遊びを通じ、子ども達を育成 ―自然体験塾「めだかつこクラブ」の活動―



ひたかみ水の里 代表理事 ● 新井偉夫

岩手、宮城両県を流れる大河・北上川では、古くから品物の輸送手段はもとより、水田へ水を引くための手段として活用され、子ども達の遊び場としても機能していた。

しかし、現代では「危ないから」「服が汚れるから」「怪我をするから」といった理由から、親が子どもを川へ近付けなくなった。また子ども達自身も、外で遊ぶ機会が減り、屋内でのテレビゲーム等に夢中になるなど、川や自然は子ども達の生活から疎遠な存在となってしまった。

### 自然との共生や協力を学ぶ

このような現代の子ども達に自然への関心や親しみを取り戻してもらおうと、NPO法人ひたかみ水の里を設立し、自然体験塾「めだかつこクラブ」を始めた。「川や海で遊ば

う（自然を知る）」「生き物と友達になろう（自然との共生）」「みんなと仲良くなろう（協力と協同）」を柱に、子ども達に川で自由に遊んでもらう取り組みを実施している。

川への危険性は教え込むが、遊び方は子ども達の自主性に任せ、目で見て感じるまま、遊んでもらい、感性を養う。めだかつこクラブの他にも、地域の小学校の総合学習支援や、教員のNPO体験学習など、地域や流域での活動を行っている。

クラブの主な活動の一つに、子ども達のカヌー体験がある。「うわー、怖い」「前に進まない」と話していた子ども達も次第に声をかけ合い、意気投合して漕ぎだす。ここでのカヌー体験が功を奏し、高校・大学でカヌー部に入部する子もいる。

石巻工業高校のカヌー部の男の子

は「めだかつこクラブに入っていて、ずっと川で遊んでいた。ふざけてみると新井さんから怒号が飛んできましたが、それもいい思い出です」と話していた。

また、めだかつこクラブの子ども達を連れて市内の他の地域づくり団体のイベントに参加して活動の幅を広げ、毎年一月には活動発表会を開き、父兄や一般の方に対するフォローアップも欠かさず行い、地域へ還元している

### 震災後も自然と遊ぶ 楽しさを体感してもらう

昨年八月十一日に行われた海の学校は、がれきや解体されていた家屋が今も多く残っている石巻市北上の皿貝川で行った。当日は「海や川は怖いだけでなく、楽しいところ」と熱弁し、子ども達に地域の自然で遊ぶ楽しさを体感してもらった。

めだかつこクラブのメンバーを始め、震災で引越しを余儀なくされた

子ども、この日は石巻市に戻ってきていた。その母親に話を聞くと、  
「新井さんは、ちゃんと子ども達を叱ってくれるからいい。自然体験だけでなく、道具の片付けなどでもチームワークが必要なので、生きていく力が身に付いている気がする」と話してくれた。

東日本大震災では、子ども達自身に大きな影響を与えていることはもちろん、子ども達が自然に触れ合う機会の減少が懸念される。

そこで、子ども達が自然に触れながら一緒に遊び学ぶ機会をなくしてはならないと、これまで通り活動を継続することを決意し、活動を継続してきた。震災を経験し、落ち込んでいる子ども達の心身の回復を図り、また、子育て支援を通して地域住民の地域活動への積極的参加を促すことで、子ども達や地域の「やる気・勇気・元気・仲間づくり」を実現していきたい。



カヌー体験の指導



荻浜小サマーキャンプ



海の学校が行われた皿貝川

## 松井利夫氏

# 「与える心があるから豊かになる」 —私財を投入し、地域の人材育成に力注ぐ—

公益財団法人起業家支援財団理事長  
認定特定非営利活動法人ふれあい自然塾理事長

● 松井利夫

二十五歳だった一九六八年、思い切って独立し、「松井設計事務所」(一九七一年にアルプス技研を設立)を開業した。創業当初は、技術も金も信用力もない「ないないづくし」だったが、技術者の派遣と請負を柱に事業を拡大し、九六年にジャスダック、東証二部を経て、二〇〇四年に東証一部上場企業の仲間入りをした。

私は、約四十年にわたる経営経験から、経営者には三つの成長段階が

あると考えている。第一階段は、自己中心的な姿勢・考えで行動する。第二段階では、自分を客観視しながら行動できるようになる。

## 社会貢献こそ経営者が 目指すべき最終目標

そして第三段階は、企業の公的使命を意識して経営に臨む。社会への貢献と、最大多数の最大幸福を心から願う行動する。この段階こそが経営者が到達すべき最終目標である。

授業風景



初夏の収穫体験



私自身、社会への貢献を強く意識し、また地方が元気になるしないと日本が元気になるしないし、地方で活躍している人が全国、そして世界に向け活躍の場を広げていくことが重要と考え、その基本となる地域での人づくり、特に起業家を輩出

する仕組み作りをしていきたいと考え、財団法人起業家支援財団(現公益財団法人)を設立した。

起業家支援で最も大切なのは「魚を欲する者に魚を与えず、魚のとり方を教える」ことだ。本物の親切には厳しさがある。自分に厳しくし、相手へも厳しさと真のやさしさ(愛情)で接する。相手の未来を考え、成長を願う思いやりの心(親心)と責任を持って、計画的に継続して支援することだと考えている。

また、自然とのふれあいにより自立の精神や協調性を養い、情操教育を行い、豊かな人間性を育むために、特定非営利活動法人ふれあい自然塾(現認定特定非営利活動法人)を設立した。

私は、六年前に経営の第一線から退き、現在は最高顧問として、後継者の相談に乗ったり、引継ぎをしながら、第二の経営者人生として、財団やNPOの仕事をしている。

次の起業家を育て支援することは、世の中の人と金を利用して事業を興し、広く社会の支持を得て事業活動を行い、成功している経営者が率先して実施すべき社会的責任の一つだと思う。経済の循環機能である。こうした思いから、二〇〇七年三月に財団法人起業家支援財団(現公

益財団法人)を設立し、学生起業家支援事業や青年起業家支援事業、アントレプレナー教育、また内閣府より委託を受け、「社会的企業育成支援事業」を実施し、経済の担い手としての次世代に向け創業をめざす者を育成・支援し、産業振興を通じて経済社会の発展を願っている。

## 「ふれあい自然塾」を設立

昨年の東日本大震災で、自然と人間の暮らしについて改めて深く考えさせられたが、人間の暮らしは、自然環境と深く結びついてきた。

そこで、自然とのふれあいを通じ、自然の恩恵、社会の恩恵を感じ、協調性を養い、自立の精神を高め、情操教育を行い、生きることの大切さを体感できる場を提供すべく、二〇〇六年十一月に特定非営利活動法人「ふれあい自然塾」(現認定特定非営利活動法人)を設立した。現在は、従来の活動に加え、神奈川県より委託を受け、「多様な主体による交流促進事業」を推進している。

これらの活動に対し、なぜこのようなかをやるのかと質問されると、私は次のように答える。「豊かだから与えるものではない。与える心があるから豊かになる」が私なりの理念だからである……と。

# 伝え残したい私たちの宝「猿鬼伝説」 —民話を活かして地域を元気に—



猿鬼歩こう走ろう健康大会 大会長

● 向峠智隆

昔むかし、頭に角を持ち体中を漆で塗り固めた猿のような怪物がいた。怪物は「猿鬼」と呼ばれ、川辺の洞窟を根城にしている悪さを働いて村人を苦しめるので、知恵を絞った女神が筒になった矢で退治した。私が地域資源として着目し、四半世紀にわたってこだわってきた「猿鬼伝説」のあらすじである。

石川県能登町は、能登半島の先端に位置し、平成十七年三月に三町村が合併して誕生した町。私が住む当目地区には、昔からこの物語が語り継がれてきた。周辺の集落には伝説に由来する地名が多くあり、「当目」は猿鬼の目に矢が命中した所と言われている。猿鬼を祀る岩井戸神社や亡骸を葬った鬼塚も残っている。

昭和六十二年に当目公民館長に



「猿鬼歩こう走ろう健康大会」は、23年度で25回目を迎えた



「鬼」をテーマにして地域づくりを行っている自治体などが集う「全国鬼サミット」



「第8回全国鬼サミット」を能登町（当時柳田村）で開催した



「猿鬼伝説」の普及を機に、ふるさとの民話が見直され、観光客が増えている

就任した私は、この伝説を活かして地域を元気にする取り組みを開始した。同年には柳田走ろう会と連携し、伝説の舞台・岩井戸地域を走る「猿鬼歩こう走ろう健康大会」を開催。地元信用金庫の職員百六十人がボランティアで大会運営を支えてくれるようになり、平成二十三年には二十五回目を数えている。

大会のキャラクター「猿鬼くん」は能登出身のマンガ家・永井豪さん

によるものである。

平成五年には、この伝説を地域の宝として伝え残していくため、地元小学校の協力も得ながら地区住民らで能登各地を調査。伝説は輪島市や珠洲市、七尾市にも広がっており、猿鬼が描かれた絵馬や伝記の存在も明らかになり、地域資源としての輝きを増した。

能登町にはブルーベリーが栽培されており、それを委託醸造して平成元年に発売されたワインは「能登ワイン 猿鬼伝説」とネーミング。猿鬼がメジャーになるにつれワインの売れ行きも上昇し、第三セクターによる地元ワイナリー建設へと発展していった。

私たちは、鬼をテーマにした地域づくりに取り組み自治体などが集う「全国鬼サミット」に参加し交流してきたが、平成十三年には民話による第八回サミットを開催することが

できた。行政もこれをハード面で応援。岩井戸神社への散策道や地名看板、駐車場が整備された。

その後は、「かたりすと」の養成に取り組んだ。かたりすとは、猿鬼伝説などの民話のほか能登の歴史や生活などを語り伝える人を指す。かたりすと養成講座を行ったところ、修了後に受講者たちが自主的に「とんと昔の会」を結成。町内の小中学校や交流施設、高齢者福祉施設などからの要請に応え、口演活動を行っている。

現在私は、能登町観光ボランティアガイド協会の副会長として、猿鬼ゆかりの地を歩いて案内する活動を行っている。地域の宝としてこの伝説を子どもたちに語り継いでいきたいとも思っている。今回の受賞は私を取り巻く多くの方々の協力の賜物であり、これからも体力が続く限り猿鬼伝説の魅力を伝えていきたい。

## 高橋幸照氏

# 農村協働力を復活させる取り組み ―農村文化の保護や地域資源の活用に尽力―



多気町 ● 高橋幸照

私達の地域も含め農山村では、高度化する文明や経済の発展が、逆に農業・農村に潜在していた大切な「農村協働力（地域の絆）」を衰退させ、それに人口の減少や農業者の高齢化と後継者不足が追討ちをかけて遊休農地が増加し、農村の基礎的共同作業である水路の泥上げや農道の草刈りといった、集落機能の低下が顕著となっている。

どうすれば「農村協働力」を昔の

よう高めることができるのか。

私は水土里ネット（土地改良区）という仕事柄、このことがいつも頭から離れないことである。そして、少しでも何かやってみようと地域の人びとといろいろな活動を共にし、二十年が過ぎた。

この中で、コミュニティ（共同社会）に大きく影響を与えたのが、平成五年から始まった十集落の地域住民と水土里ネット立梅用水が協力



あじさいいっぱい運動



あじさいまつり人気の「立梅用水ボート下り」



コミュニティビジネス施設「まめや」

し、農業用施設周辺にあじさいを植え、その景観形成と共に「水・土・里を守ろう」という「あじさいいっぱい運動」である。

この活動を通じ、特に地域が変わったことは、人の意識の変化である。自分が植えたあじさいが咲けば素直に嬉しいし、梅雨の季節には友人や縁者を招いて自分の村を自慢したくなる。

そして、今まで誰も見向きもしなかったところから大勢の人が見に来てくれるようになった。

### 20余年の活動が結実

二十余年続くこの運動が結実し、地域に対する誇りや愛着を人々に根付かせたと思う。また、この運動から地域の特色と農村資源を活用した「あじさいまつり」が生まれた。あじさい・ボランティアにとっては、一年の活動集大成といえるべきものであるが、地域ぐるみで集う楽しみもまた一つ増えた。

この祭りも今年十六回目を迎え、一万人を超える「都市と農村の交流」を象徴する祭りとなり、地域経済に少なからず影響を及ぼすほどに至った。今日では、ボランティア仲間の協働力という人的資源を活かし、コミュニティビジネス施設の運営や農

業六次産業化が進められつつある。

平成十九年からは、国の進める「農地・水・環境保全向上対策」にも取り組み、県下最大規模となる十集落を一つにした「多気町勢和地域資源保全・活用協議会」が多様な十七団体、三支援組織の参加を得て運営されている。この対策のテーマが「農村協働力を活かし、地域を守り育もう！」ある。

### 「地域の絆」は生まれてくるもの

私は、今まで自分の仕事のかたわら、ボランティア活動の事務局や農地・水・環境保全向上対策の事務局をさせていただき、裏方として「人と人、人と地域資源をむすぶコーディネイター」のような役割を果たしてきた。

確かに、地域の課題の高齢化とか人口の減少とか、歯止めは難しい。しかし、人にやる気と地域に元気があり、お互いの信頼や助け合いのできる地域社会づくりを継続して進めていけば、地域をきつと明るいものへと導いてくれる。そう確信したい。そして、「地域の絆」とはつくるものではなく、心一つにし、行動を共にする中から生まれてくるものである。このことを心にきざみ、地域活動に活かして行きたい。

## 安川恵造氏

# 鎧を脱いで笑いで健康づくり ―高齡パワーで地域を明るく活性化―



太子町 ● 安川恵造

### 活動前

私の住んでいる地域は、兵庫県の南西部で姫路市の西に位置し、人口三万四千人余り、聖徳太子に所縁のある、太子町という街である。

私は今七十四歳だが、二十五年前二十歳の息子を交通事故で亡くし一時は茫然自失、意欲喪失、うつ状態であった。十年ほどしてやっと目覚め、「息子の青春を自分が体現してやろう」と決意した。それまでは消極的であった行動を改め前向きに、何事にも好奇心をもって実践する。

それから間もなく自治会長に選ばれ二期四年、その後、老人会長を三期六年（継続中）やらせてもらった。当初、地元のことは何も分からず苦労したが、今思えばそれが現在の活動につながっている。今では在職中

よりも忙しく楽しんでいる。その活動の一部を紹介したい。

### バカボン一座

退職後の平成十三年、兵庫県いなみ野学園地域活動指導者養成講座に入学。各地域より町長、自治会長等の推薦を受け入学して来た人ばかりで、地域活動やボランティア活動を既に行っている人もいる。年齢は六十代から七十代である。

授業は健康・一般教養・地域活動に関する知識等。二年間学び、語らい、遊び、アツと言う間の楽しい出会いと充電の期間であった。

### 卒業後

太子町出身の同窓生七人（入学後



バカボン一座でマジック

知り合った仲間）が集まって「地域を明るく活性化」させようと「バカボン一座」を立ち上げる（マジック、皿回し、銭太鼓、紙芝居、腹話術）。訪問先は高齡者施設、知的障害者施設、公民館、地域のふれあいサロン、幼稚園、子供会等で年間五十〜六十回要請に応じている。

### あすか応援隊

平成十八年「のじぎく兵庫国体」で太子町はラグビーの会場になった。選手や応援の来客に「心のこもったおもてなし」をしようと太子町老人クラブの有志で応援隊を結成した。隊員を募ったところ五十四人（平均年齢六十八歳）の応募があった。ユニホームは濃紺のシャツの上に黄色のバンダナを首に巻き、白いズボンと靴、そして長い鉢巻をしめ颯爽とした姿になった。

この高齡者を応援隊らしくする訓練は大変。声が出ない、身体がまわらない、動きがそろわない。指導して頂いた方々には感謝！感謝！

応援スタイルは口上・手拍子・笛・太鼓・拍子木とシンブルながら、歳も忘れて一生懸命の演技が良かったの



あすか応援隊で口上



あすか応援隊で演技中

か、それとも異色の高齡応援隊ということか、大好評で新聞テレビ等で多く取上げていただいた。

国体終了後は「地域の活性化と元気を」発信しようと、町、地区、団体等の行事で今も活動している。

平成二十一年五月NHKラジオ「ここはふるさと旅するラジオ」で放送、十月NHKテレビニュース「とっておき兵庫」、二十二年九月「野口聡一宇宙飛行士ふるさと太子町へ帰還報告」等で出演の模様が放映されて、「地域の活性化」に役立てたかと思う。この他にも「ほがらか隊」（どじょう堀い等踊、リズム体操）、「ウォーキングの会」（月一回）、「健康体操教室」、その他五ヶ所。

今は何をしても楽しく、人の喜びが我が喜びと感じ毎日が充実している。これも家族と仲間の協力のおかげと感謝している。笑門来福！笑顔で健康。元気に生涯現役を全うしたいと願っている。

奨励賞

島根県出雲市

財団法人出雲市教育文化振興財団（出雲芸術アカデミー）

# 「音楽のまち出雲」の推進

## ―芸術文化の振興で青少年の育成に貢献―



学長 ● 米山道雄

出雲市では、長い歴史と伝統が息づく芸術文化の都・出雲として「心豊かでうるおいのあるまちづくり」のために、芸術文化の振興と青少年の健全育成に力を入れている。

成十七年十月に「出雲芸術アカデミー」が開設された。

### 教育・研究・演奏が三位一体

そのため、学校・地域社会・市民の活動を基盤にしながら、芸術文化を通して二十一世紀を支える子どもたちの豊かな心を培い、個の持つ素晴らしい感性を引き出す「心」の育成の場として、二十一世紀出雲芸術文化のまちづくり条例に基づいて平

「教育・研究・演奏」を三位一体とする活動を理想とし、それを実現するための機関として、人材育成活動を行う「音楽院」、学術研究活動を行う「音楽研究院」、演奏活動を行う「出雲フィルハーモニー交響楽団」が設けられている。

音楽院では、幼児科、本科（合唱



出雲フィルプロムナードコンサート2007



小学生の弦楽合奏講座



オーケストラと合唱でつくるステージ

コース・オーケストラコース）別科（一般合唱、一般オーケストラ）で幼児から年配者まで幅広い年齢層の受講生が技術向上に一生懸命取り組んでいる。幼児科による座布団コンサート、本科・別科によるファミリーコンサートを成果発表の演奏会として定期的に実施している。

音楽研究院では、講師がオーケストラ演奏法研究を受講したり、講師演奏会や講師の研修支援を行い、自己研鑽を促進し、指導者育成にも努めている。

出雲フィルハーモニー交響楽団では、年二回の演奏会を実施している。いずれもオーケストラセミナー形式で、出雲地域のメンバーを中心に全国からも出演者を公募し、最終日に発表会を持っている。

また、地域との連携、地域への貢献としてアウトリーチ事業にも力を注いでいる。「ヴァイオリンクラブ」として市内の小学校へヴァイオリンの体験・指導に出かけている。「出前講座」として、市内小中学校の授業での講座や、市内の吹奏楽部部員の演奏指導を実施し、技術向上に寄与している。

出雲芸術アカデミーは創設以来六年半あまりが経過したが、地域での文化活動を推進するため、とりわけ

音楽面で、声楽と器楽の分野における人材の育成、また指導者や鑑賞者を育成してきた。

### Uターン者も含め多くの卒業生輩出

だれでも参加しての合唱、合奏の楽しさに力点を置くとともに、より専門的に学べる体制も整えてきている。多くの卒業生を輩出し、地元での音楽活動への積極的参加、音楽大学への進学、Uターンしての音楽活動など取り組みの成果が現れている卒業生が育ってきた。

年二回のオーケストラの演奏会や成果発表の演奏会、講師による演奏会などで演奏者や指導者の技術の向上に加え、芸術鑑賞機会の提供に対し多くの聴衆が集まるようになり、鑑賞者も育っている。

平成十九、二十二年度に実施されたオペラ公演では、演奏面、運営面においても大きな役割を果たすなど、出雲芸術アカデミーの活動、取り組みは、一般市民から理解され、重要な存在となっている。

今後は講座については指導陣の充実を図り、質、量ともにグレードアップする。演奏会もフルオーケストラに室内オーケストラの演奏会も加え、レパートリーを拡充したい。

# ゆるキャラ(R)グランプリに一票を！

「人気投票」でPR活動に活気



(社) ゆるキャラさみっと協会 代表理事

● 荒川 深冊

最近是一般名称のように使われるご当地キャラクターを指す言葉「ゆるキャラ」は、イラストレーターのみうらじゅん氏が地方自治体がPRするために生み出した「ご当地のキャラクター」を総称するために造った言葉である。

(社) ゆるキャラさみっと協会は、この「ゆるキャラ」という言葉の使用許諾を受け、全国各地の「ゆるキャラ」達のネットワーク作りを通じて、効果的な活動のサポートや、ゆるキャライベントの協力などを行っている団体である。

## ゆるキャラ(R)グランプリとは

この「効果的な活動をサポートする」という意味で開催したのが、ゆるキャラ(R)グランプリである。

グランプリのホームページ上にある「ゆるキャラ」のPRページの投票ボタンを押すことで、その「ゆるキャラ」に投票できる仕組みである。投票は1メールアドレスにつき一日一回、最長七十二日間投票ができるシステムであった。

「ゆるキャラ」は、このグランプリに参加することでPRが可能となり、「ゆるキャラ」への投票促進を目的に活動することにより、今までただ漠然と活動してきた個々のPR活動に活気を与えるのではないかと考えたのである。

ただ、このイベントを単なる人気投票での順位付けと捉えられる可能性があったため、「単なる人気投票ではなくこのイベントを利用して知名度の低い「ゆるキャラ」が全国区の知名度を得てもらうためのきっかけであり、投票数はこのイベントを利用して積極的に活動した結果。つまり通信簿のようなもの」と積極的に告知させていただいた。

## 全国から349キャラが参加

参加募集開始から参加申込みが多く、少人数のスタッフで運営していたために大変な作業量を連日行うこととなった。事前に見積もった作業量を少なく考えていた運営側の反省点もあったが、これほどまでに「ゆるキャラ」を運営されている方々が

熱心に活動しようと思われているのか！と嬉しい反省でもあった。

最終的に高知県を除く全ての都道府県から三百四十九キャラ参加いただき、全国に「ゆるキャラ」の新たなネットワークが構築できた。

参加した「ゆるキャラ」にとっては、ホームページへの訪問者数が投票開始から右肩上がりに増えていき、最大で一日十万を超え、トータルで三百万以上の訪問者数となり、非常に効果的なPR媒体になったと思う。

若干、投票システムに不測の不備があり、投票終盤で参加いただいた「ゆるキャラ」にはご迷惑をお掛けしたが、この不備がマスコミに取り上げられたことにより、イベントの知名度が飛躍的に上がり、想像以上のPR効果になったと思われる。

後日、この報道を含めグランプリ全体での広告費用換算をしたところ二千万円を超える効果が分かった。

## 日本を笑顔と活気ある国に

投票数上位の「ゆるキャラ」は、テレビ・イベントへの出演オフアールや地元産品のパッケージ化などの話も来るようになり、その効果は計り知れないものになった。

下位の「ゆるキャラ」達もさらなる知名度アップへの取り組みなどの活動の励みとなり、これからの「ゆ



告知ボスター

## タウンページ協賛ゆるキャラ(R)グランプリ2011

| 順位 | 地域       | キャラクター名              |
|----|----------|----------------------|
| 1  | 熊本県      | くまモン                 |
| 2  | 愛媛県今治市   | バリイさん                |
| 3  | 東京都西国分寺市 | にしこくん                |
| 4  | 栃木県大田原市  | 与一くん                 |
| 5  | 愛知県名古屋   | はち丸(かなえっち)・だなも・エビザバス |
| 6  | 埼玉県深谷市   | ふっかちゃん               |
| 7  | 福岡県北九州市  | モモマルくん               |
| 8  | 岐阜県岐阜市   | やなな                  |
| 9  | 大阪府箕面市   | 滝ノ道ゆずる               |
| 10 | 新潟県      | レルヒさん                |

るキャラ」界の活性化に大きく寄与してくれろと考えている。  
ゆるキャラさみっと協会はそんな「ゆるキャラ」達をこれからもサポートし、日本を笑顔で活気のある国にしていきたいと考えている。



徳島県佐那河内村長 ● 原 仁志

## 徳島県に残った唯一の村

佐那河内村は、県都徳島市の中心部から西南に約十六キロメートル、園瀬川に沿ってさかのぼった位置にあります。

地形は東西約九・五キロメートル、南北約四・五キロメートルの平行四辺形を呈しており、古くは、狭長村（さなが村）と称された時代もありました。村の名前が、個性的で県外の人々には読みづらく、覚えにくいようです。

本村は、明治二十二年に市町村制が始まって以来、どことも合併することなく単独の自治体として今日を迎えています。昭和四十二年には郡内の町が徳島市に編入合併されたため、一郡一村となり、平成の市町村合併により徳島県に残った唯一の村となりました。そして、多くの農山村地域と同様に人口減少が進み、昭和三十年代には約五千二百人を数えましたが、現在では半減し、約二千七百人の村民が暮らしています。

本村は古来より、農業を基幹産業として繁栄してきました。江戸時代には阿波藩の殿様、蜂須賀公への献上米の里として棚田で米が盛んに生産されました。明治時代には温州みかんの生産が始まり、特に戦後は貯蔵温州みかんの栽培が盛んとなりました。

しかし、温州みかんの生産過剰や昭和五十六年二月の大寒波により、本村の温州みかんは大打撃を被り、その後はスタチ、いちご、ネギ、しいたけ、キウイフルーツなどの作物が生産奨励されています。

徳島県の特産「スタチ」は、村内多くの農家が栽培をしており、五月頃よりハウス栽培物が、八月には露地物、十月から三月まで貯蔵物とほぼ周年を通じて市場に出荷されています。是非、さわやかなスタチの香りをご賞味下さい。さらに、一粒が五百円もの高値で取引されている、「ももいちご」も生産されております。しかし、担

い手不足による耕作放棄地の増加や、鳥獣被害が多くなるなどの課題も山積しています。

本村では、住民の声を活性化に反映する仕組みとして、平成二十二年十一月に「村づくり住民会議」を立ち上げました。この組織は、若者定住・子育て支援、高齢者が安心して暮らせる環境、農業を基幹とする産業振興、環境にやさしい村づくり、地域のコミュニティ振興の五部会から成り立ち、村民に対策を検討していただき、併せて実践もお願いする組織となっています。

一年間の議論を終え、平成二十三年十一月には企画案が各部会から提案され、年末には、環境にやさしい村づくり部会による「フリーマーケットとふるさと再発見ウォーキング」が開催されました。平成二十四年三月には、地域のコミュニティ振興部会が主体となって、防災訓練の実施が計画されています。このように地域課題の解決と活性化のため、今後も住民の貴重な知恵と汗を村づくりに活かし、住民主体の村づくりを進める予定です。さて、現在の本村の姿を後世に残し、先人が営々と築いてきた村の風土や産物を今後も活かし、美しい農山村と人々の絆をいつまでも引き継ぐため、「村の写真集」を作成中です。

この写真集は、村内全集落の村民の集合写真、四季折々の風景、村民の農作業や生活の様子、伝統行事など納めています。

今後も、農村の風情を残し、徳島県に残った唯一の村として、本村を訪れた人々には安らぎを、村民には活力が備わった村を目標として、村づくりに行政と村民が力を合わせ努力してまいります。



ぎふで「挑戦」憧れの農業

高山市丹生川地内「夏秋トマト農場」にて



ぎふで「発見」古民家の魅力

恵那市串原地内田舎暮らし体験館「結の炭家」にて



ぎふで「満喫」週末田舎暮らし

揖斐川町藤橋地内滞在型市民農園「ワダ農園」にて



ぎふで「実感」のびのび子育て

郡上市明宝地内「古田川河畔」にて

# ぎふふるさと暮らし 応援キャンペーン

岐阜県地域振興課 移住・定住担当

〒500-8570 岐阜市藪田南2丁目1番1号 ☎058-272-8078 (直通)  
FAX058-278-2568 Eメール / ijuu-gifu@pref.gifu.lg.jp

岐阜県はあなたを全力でサポートします!

「農業を始めたい」  
「古民家に暮らしたい」  
「自然の中で子育てがしたい」…  
という皆様、その憧れを  
岐阜で実現してみませんか?



移住・定住応援サイトで情報発信中! ぎふ ふるさと暮らし

検索

**水** 水俣市は熊本県の最南端に位置し、西は不知火海に面し、北を大関山、南を矢筈岳などの山に囲まれた町です。

水俣には、不知火海を臨む絶景が自慢の海の「湯(ゆ)の児(こ)温泉」、山間の静かな川沿いに佇む山の「湯の鶴温泉」という趣の違う温泉街があります。

また、3年前にオープンした『エコパーク水俣バラ園』では、750種類6500本のバラが咲き誇り、開花時期には市内外から多くの方でにぎわいます。

特産品は、生でそのまま食べることができるサラダたまねぎや、柑橘類のでこぼん、お茶などがあります。

また、数年前から若手有志を中心に『スイーツのまち水俣』の町づくりを進めており、地元産のお茶や栗を使ったお菓子が作られるなど広がりを見せています。毎年秋にはスイーツスタンプラリーが開催され、多くの方々が来られ、人気イベントとなっています。このほかにも、卵を使わない白い麺が特徴の「みなまたチャンポン」などもあります。

水俣にお越しの際は、ぜひ温泉に入っておいしいスイーツを味わってみませんか。



■エコパーク水俣バラ園 開花時期:春(4月下旬~5月下旬) 秋(10月下旬~11月中旬)



■湯の鶴温泉 国民保養温泉地指定。湯治場として愛された泉質が自慢。



■徳富蘇峰・蘆花生家 熊本県内で最も古い町屋づくり。熊本県指定文化財(史跡)



■サラダたまねぎ 水にさらさなくても生で食べられるたまねぎ。収穫時期は3月から5月。



■水俣チャンポン 卵を使っていない白い麺が特徴。スープベースは、とんこつ、鶏がら、海鮮などさまざま。



■みなまたスイーツ 歩いていける範囲に10軒ほどのお菓子屋さんがあります。地元の素材にこだわったスイーツなども。



■湯の児温泉 不知火海に沈む夕日を眺めながら入ることができる露天風呂なども。

## 平成23年度 地域再生実践フォーラムを開催

新たな視点や手法の導入等による地域の再生、持続可能な地域づくりを目指し、地域活性化に向けた実践的エッセンスを広く提言・発信します。

- 日時 平成24年3月7日(水) 14:10~17:15
- 会場 東京国際フォーラム(東京都千代田区丸の内3丁目5-1)  
※同会場にて13:00より第16回ふるさとイベント大賞表彰式が開催されます。
- 対象 地域再生に関心がある方 400人(参加無料)
- プログラム

基調講演 14:10~15:10

「大震災後の日本経済と地域活性化を考える」

講演者: 高橋 進 氏(㈱日本総合研究所理事長)

分科会 15:25~17:15

①「地産地消の自然エネルギー」

コーディネーター: 室山 哲也 氏(NHK解説主幹)

パネリスト: 柏木 孝夫 氏(東京工業大学先進エネルギー国際研究センター教授)  
田中 伸男 氏(国際エネルギー機関(IEA)前事務局長)  
牧 葉子 氏(川崎市環境局担当理事)

②「持続的な観光振興による真の地域再生の実現」

コーディネーター: 清水 慎一 氏(立教大学観光学部特任教授)

パネリスト: 大西 雅之 氏(㈱阿寒グランドホテル代表取締役社長)  
山口 スティーブ 氏(㈱トラベル東北代表取締役)  
七條 牧生 氏(観光庁観光地域振興課長)

●申込方法

参加申込書に必要事項をご記入の上、メールまたはFAXでお申し込みください。

※様式は、センターのホームページ(<http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp>)からダウンロードできます。

●定員になり次第申し込みを締め切らせていただきます。

●問合せ先

地域支援課 TEL: 03-5202-6137 FAX: 03-5202-0755 E-mail: [chiiki@jcrcd.jp](mailto:chiiki@jcrcd.jp)

通信センター



昨年度のフォーラムの様子

## 「ふるさと情報コーナー」のご利用をお待ちしております ~日本橋でOPENから1周年!~

東京駅八重洲北口から徒歩5分。日本橋プラザビル1階に「ふるさと情報コーナー」がオープンして、お陰さまで1年を迎えることができました。昨年6月からは、土日祝日もオープンし、周辺の皆様にも親しまれ順調に推移しています。

都道府県・市町村の観光・イベント・物産等のパンフレット約2500種類を展示し、ご来場者に無料でお持ち帰りいただき、旅の下調べや旬の情報等の入手にご活用いただいています。また、屋外スペースでは、年間約80日間地方イベントが開催され、産地直送の新鮮な品々が販売されます。

同じフロアには、山梨県と山口県のアンテナショップも営業しており、都心にいながら、旅をした気分になれる空間です。

【ご利用時間】 10時~18時(ふるさと情報コーナー)

【休日】 元旦

【所在地】 東京都中央区日本橋2-3-4 日本橋プラザビル1階

【問合せ先】 地域づくり情報課 電話03-5202-6138



## 全国の地域づくり団体の皆さま、 お世話になりました!

▼地域づくりに熱い思いで取組まれている方々のお話を聞き、私自身も故郷への思いがより一層強くなりました。いっぺんにふえーでーびたん(大変ありがとうございました)。(沖縄県・稲福)▼地域を元気にしようと奮闘されている団体の方々から直接お話を聞く機会を得ることができ、自分にとって貴重な経験となりました。(日立市・山口)▼取材を通じて、地域づくりに取り組む方々の熱い思いを感じることができました。ありがとうございました。(久留米市・京野)▼様々な分野で活動・活躍されている団体の方々とお会いする機会にも恵まれ、大変貴重な経験をさせていただきました。また、それぞれの地域での先進的な取組も学ぶことができました。(津市・水谷)▼先進的な取組を行っている団体の方々から、直接お話を聞いたことは、自分にとって貴重な経験となりました。お忙しい中取材に応じていただきました皆様、本当にありがとうございました。(高山市・奥原)▼柔軟な発想と行動力、そして熱意に触れる機会をくださった地域づくり団体の皆さまに深く感謝申し上げます。(山梨県・小野)▼各地の地域づくり現場の生の声をうかがうことができ、何ものにも代えがたい経験をさせていただきました。お忙しい中、快く取材に応じていただきました皆様、大変ありがとうございました。(鶴岡市・前田)▼地域づくり団体のみなさまには、お忙しい中、快く取材に対応していただき心より感謝を申し上げます。(長野市・唐澤)▼地域を元気にしようと活動しておられる地域づくり団体のみなさまから直接お話を伺うことができたのは非常に貴重な経験でした。この経験を地元に戻り活かしたいと思います。(綾瀬市・平野)▼「地域づくり」の編集作業を通して、全国の様々な事例を学び、視野を広げることができました。取材等でご協力いただいた皆様に深く感謝いたします。(石川県・杉森)



## ★日本橋プラザビルイベントスペース

3月

●3月15日(木)～16日(金)  
盛岡市(岩手県)  
『おでんせ!盛岡・八幡平』



(写真)

1、2 1月11日～13日秋田県南観光PRと物産展(秋田県仙北・平鹿・雄勝地域振興局)

3、4 1月26日～27日新鮮なかやま市(中山町)

### 【編集後記】

▼三月号の特集テーマは「平成二十三年度地域づくり総務大臣表彰」です。全国各地で地域をより良くしようとする団体の活動を表彰し、地域づくりへの情熱を高め、豊かで活力ある地域社会の構築を図るのが目的です。今回も受賞団体の活動内容は多彩で、いずれも地域づくりのヒントになる事例ばかりです。

▼東日本大震災から一年を迎える時期だけに、受賞者の顔ぶれには被災地域で復興に取り組む自治体や団体が目立ちました。全国から被災地に向けられた支援の動きなどにも、確かな「絆」の広がりを感じました。

▼大賞を受賞された宮城県南三陸町は、あの大津波で役場に保管されていた震災前の記録写真なども「すべて流出してしまった」そうです。かろうじて町民が保存していた被災前の写真をお送りいただきました。同町では震災後、「南三陸復興市」を月に一度開催し、そこを住民同士が再会の場とし、復興への活力を生み出してきたとのこと。

▼また、優秀賞を受賞された岩手県遠野市は、県内の沿岸被災地の支援基地として一連の活動がたたえられました。個人で受賞された岩手県二戸市の久慈浩介氏、沖縄県大宜味村の金城笑子氏は、本業を極めながら被災地支援や専門性を活かした地域活動が、特に評価されました。

▼今月末で出向元に帰任する当センター職員(編集委員兼務)のメッセージをセンター通信欄に掲載しました。取材等で訪れたまちづくり団体の皆さまにはお世話になりました。(原田)

### 「4月号予告」

特集Ⅱ「日本で最も美しい村」に学ぶ(仮)

### 地域づくり3月号

2012年3月1日発行 編集・発行=財団法人地域活性化センター

東京都中央区日本橋2-3-4 日本橋プラザビル13階 電話03-5202-6131(代) <http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/> 印刷・製本/株式会社丸井工文社

法律で許可された場合以外に、本誌からの無断転載を禁止します

落丁・乱丁はお取り替えます。地域づくり情報課(03-5202-6138)まで、ご連絡下さい。

宝くじは、  
地方自治体の公共事業等に  
幅広く使われています。

NEW

ワクワク、  
続々。



宝くじの収益金は、  
病院や検診車、図書館や動物園、  
災害に強い街づくり、  
緑あふれる公園、美術館など、  
皆様の暮らしに役立てられています。